

[The Japanese Journal of Experimental Social Psychology, 1997, 37 (2), pp. 223-249]

交流時代における中山間地域の外部者参入 過程に関する実証的研究

——ハビタント概念の例証

岡田憲夫（京都大学防災研究所）・河原利和（財団法人環境文化研究所）

要約

本研究では、中山間地域におけるコミュニティ活力の向上に外部者の参入と関与が一つの有効な糸口を提供し得ることを、特に、小国町のケーススタディに即して実証した。その際、この種の外部者の重要性は単に頭数にあるのではなく、むしろそれぞれの「かけがえのなさ」や「個性・多様性」に裏付けられた地域社会への影響の質的側面に注目すべきであることを指摘した。これらの実証的な事実を踏まえて、地域コミュニティの人々とコミュニケーションを維持し、何らかの影響を与える外部参入者を「ハビタント」として、一般的に概念化することを提唱した。この定義をあてはめることにより、実証分析により確認された各々の外部参入者をハビタントと言い換えることができることを指摘した。その上で、ハビタント概念の明確化と分類について検討した。さらに、ハビタントの参入の促進を図る上で、内部と外部の人・もの・金・情報の面でのチューニング・チャンネル機構の重要性とその機能的要件についても実証的分析を行った。最後に、ハビタント概念が中山間地域におけるコミュニティ活力の向上等を図る上で、有効な観点を提供し得ることを明らかにした。

キーワード：参入プロセス、ハビタント、交流時代、中山間地域活性化

1 はじめに

我が国の中山間地域の多くは、人口の減少、高齢化、コミュニティの衰退等をはじめとするいわゆる〈過疎問題〉に悩み続けて今日にいたっている。これに対して、「地域活性化」の試みが中山間地域の多くの自治体で行われており、コミュニティの活力の向上に成果を挙げてきている事例もかなり見られるようになった。しかしながら、そのような成功事例とみなされる町村にあっても、

こと〈人口〉に関するかぎり、必ずしも回復基調に転じたわけではなく、相変わらず微減または漸減し続けている。

例えば、本研究のケーススタディで取りあげる熊本県小国町では、地元の小国杉に代表される「小国ドーム」、「木魂館」（もくこんかん）などの一連のハードな施設建設と、町民レベルの自主的なグループ活動とが一体となったユニークな取り組みにより、コミュニティの活力が高まりつつある。しかし、その小国町ですら、人口の減少には完全な歯止めがかからず、現時点（1997年6月）

でも微減傾向にある。この事実をどのように解釈すればよいのであろうか。

この問いに答えるためには、次の2点について確認しておく必要がある。第一に、「コミュニティの活力が向上」するか否かは何をもって識別、判定すべきかということである。第二は、第一の点に密接に関係するが、人口の多寡や増減は、コミュニティの活力の向上・低下に関して、最も適切なパラメータとなり得るかどうかということである。この点についての筆者らの基本的な立場はつまるところ、「ハビタント」の概念に基づく「頭数論」の補完の必要性にある。以下順を追って論証していきたい。

2 〈頭数としての人口の増減〉論からの脱皮とハビタント概念の提唱

現時点において中山間地域の多くが抱えている過疎問題の本質は「コミュニティの活力」の大幅な低下である。したがって、過疎問題の解決の鍵は、コミュニティの活力をどのように向上させられるかにある。その場合、人口＝頭数（あたまかず）は必ずしも適切なパラメータとはなり得ないはずである。つまり、“人の頭数”とその成長の度合いを、国や地域の活力の源とする、いわゆる〈人口本主義〉は、今後、何らかの修正と留保を要する。

人口減少は、何も中山間地域だけの特殊事情ではなくなるはずである。21世紀最初の四半世紀のうちには、日本全体の人口は静止して、以降は漸減していくことが予想される。これは大都市圏にもあてはまり得る。一方、国勢調査等の登録人口そのものが、必ずしも特定のコミュニティ（例えば、地区や集落）に居住する人の頭数を適切に反映するとは限らない実状が、現時点で既に生まれつつある。例えば、地域には国勢調査等に現れない人々が滞在し、地域活性化に様々なインパクトを与えていると実感されるケースが増えている。すなわち、人口規模が見かけ上変化しなくてもライフスタイルなど〈生活の質〉が変化している場合がある。

21世紀は、交流の時代であるといわれている。通信・情報技術とインフラストラクチャの飛

躍的革新により、地域間でそれを可能にする客観的条件は急速に整いつつある。また、21世紀はこれまで以上に〈生活の質〉の向上が、社会基盤整備計画の目標とされるであろう。これらの背景も追い風になって、中山間地域にも外部者が参入しやすくなり、その地域で新しい生活スタイルで生活を営もうとする人々が多くなっていくであろう。外部者の参入は、地域活性化に何らかのインパクトを与えて、結果的に地域の活力が向上するための基礎的環境条件（基礎体力）が整えられ、好循環過程につながる事が期待できる。

本研究では、以上のような観点から中山間地域の活性化を議論する上で、〈頭数としての人口の増減〉論を見直すための一つのアプローチを提案する。すなわち、上述した外部者とその参入パターンが、地域コミュニティに与える質的・量的影響に着目する。本研究では、そのような外部参入者を〈ハビタント〉(habitant)と呼ぶことを提唱する。

以下、まず、熊本県小国町におけるケーススタディから論点を実証するとともに、具体的な文脈の下で、ハビタント概念のあぶり出しとその肉付けや明確化を行うことにする。そして、ハビタントが地域活性化に与えるイソパクトの事例分析を試みる。最終的には、ハビタントという概念をより明確化し、その指標化を試みることによって、国や地域の政策づくりに活用していくことが、重要であることを指摘する。

3 熊本県小国町のケーススタディによる外部者の参入過程

3-1 小国町の概要

小国町は、九州のほぼ中央、熊本県の最北端、筑後川の上流に位置する（Figure 1）。総面積約1万3,672ha（東西約18km、南北約11km）、森林面積約1万7,333haで森林が約79%を占め、隣接する大分県日田地方とともに林業で栄えてきた町である。本町は、九重山系山麓地帯にあり、起伏に富み、標高320m～800mの間に耕地、山林、原野が展けている。山間高冷地帯で、気象の変化が激しく、寒暖の差が大きい。年間平均気温12.8℃、年間降雨量2,200mm以上である。道路

は、国道 212 号が南北に、国道 387 号が西から東北に、国道 442 号が東方に、いずれも中心地の宮原地区を通過して放射状に走っている (Figure 2)。

人口は、1996 年 (平成 8 年) 4 月 1 日現在で 9,860 人。うち男 4,694 人、女 5,166 人で、世帯数は 2,976 戸である。人口の推移は、1920 年 (大正 9 年) の第 1 回国勢調査時 10,203 人であったが、その後増加の一途をたどり、1955 年 (昭和 30 年) 16,467 人に達した。しかし、高度経済成長を期に減少を始め、1965 年 (昭和 40 年) 14,361 人、1975 年 (昭和 55 年) 11,228 人、1985 年 (昭和 60 年) 10,464 人、1995 年 (平成 7 年) 9,412 人まで減少した (Figure 3)。1960 年から 1985 年までの 25 年間で、人口減少率は 35% であり、国土庁制定の過疎地域活性化特別措置法 (通称新過疎法) に

より「過疎地域」に指定されている。ただし、人口減少は 1965 年から 70 年の 5 年間に 12.90% を記録してからは、やや減少率低下の方向に向っており、1990 年から 95 年の 5 年間で減少率は 4.59% となっている。

一般に過疎地域の人口減少の主たる原因として、10 代後半から 20 代前半の若年層の流出が挙げられる。しかし、小国町については、それはあてはまらない。1970 年以降、20 代後半から 30 代前半にかけての青年層については、むしろ人口の流入超過が見られる。これは明らかに〈U ターン〉が顕著に見られることを意味し、これが小国町の地域活性化につながっている可能性は十分に考えられる。1970 年代はこのような U ターン現象が全国的に認められたが、1980 年以降は、その傾向が見られなくなった。しかし、小国町ではそれが現在なお続いていることが特徴的である。

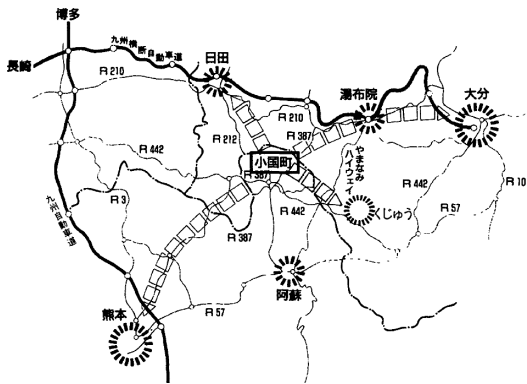


Figure 1 小国町とその周辺域

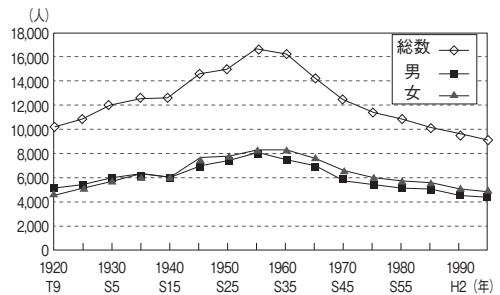


Figure 3 小国町の人口推移図

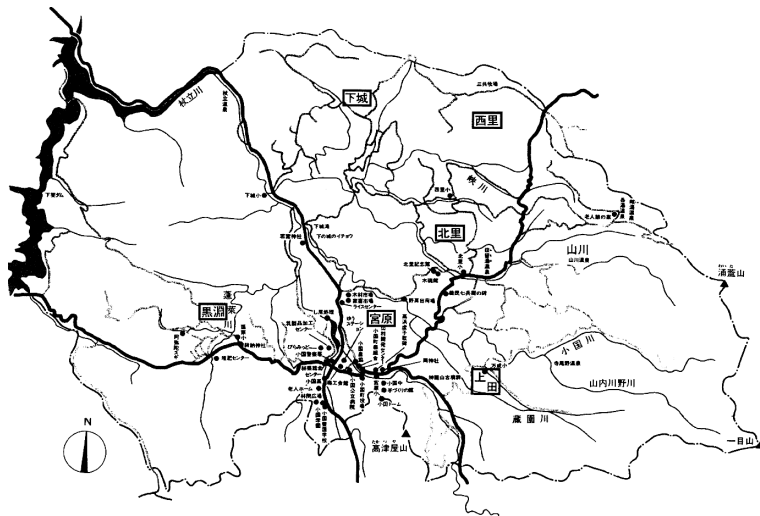


Figure 2. 小国町域図

3-2 宮崎町長の就任から悠木の里づくりへの展開

宮崎町長（当時41歳）が就任した翌々年の1985年（昭和60年）、町制施行50周年を迎えるのをきっかけに、21世紀を見据えた新しい総合的町づくり構想として、〈悠木の里づくり〉が提唱された。悠木の里づくりとは、悠久の年輪を刻む小国杉、悠々と噴き上げる地熱、悠々たる大自然等々、小国町の特性や資源を活かした、豊かで魅力ある町づくりのための構想である。これが一つのきっかけで、小国町は全国的に知られるようになったと考えられる。この悠木の里づくりは、経済効果を目的にするのではなく、「町の魅力」（個性と活力）を向上させることを目的にしていた。特に、小国町に住む人たちのライフスタイルが魅力的になることを重視していたということが特徴的である。

その背景として、当時熊本県では、全国に誇れる特産品イベントやシンボルづくりなどを通じて活力と個性ある地域づくりに取り組む「くまもと日本一づくり運動」が推進され始めていた。小国町は、悠木の里づくり推進による総合的な町の魅力づくりにより「日本一づくり運動」に参加した。この悠木の里づくりの中で、小国杉を地域デザインの中心に位置づけ、小国杉のPRとともに、新しい農山村文化のありかたを提言するまちづくりが展開された。その一環として斬新な木造建築群が町のあちこちに創出され、それらの建築が象徴する「木の復権」運動が地域づくりを刺激していった。

3-3 〈人の誘致に努める〉というポリシー

1985年（昭和60年）にスタートした悠木の里づくりは、最初のシナリオに沿って、着実に浸透し、少しずつ成果を挙げることができた。しかし、この間の社会情勢の変化や人々の意識の変化に伴い、これまでの方向性を見直し、あるいは新たな目標設定の必要性がでてきた。そこで、1988年（昭和63年）から3年間、21世紀の初頭を展望しながら小国町のこれからの地域づくりの方向や方策を示す新しいシナリオが作成された。この期間にシンポジウムや地区懇談会等が積極的に行

われ、新たな小国像づくりが模索されてきた。その結果が〈小国ニューシナリオ〉としてまとめられた。その中で、21世紀に向けて小国町の目指すべきことが〈小国ポリシー〉としてまとめられた（熊本県小国町、1991）。

小国町のコミュニティ活力の向上策の特徴は、先述した小国ドームや木魂館に代表される斬新な木造建築のハード作りと、人々の開放性と自発性を高めるためのソフト作りの組み合わせとそのバランスにある。なお、木魂館とは、北里地区のコミュニティ活動の拠点とするとともに、全町民（内部者）や来町者（外部者）のための生涯学習の交流拠点（研修施設、宿泊施設、スポーツ広場等）のことである。これらの活動の特徴は宮崎町長のリーダーシップによって個性的な肉付けがされた〈小国ポリシー・アクション〉に余すところなく表現されている。小国ポリシーとは、

- ① 「暮らしの視点」から豊かな小国をつくる
- ② 人びとが「選びとる」地域をめざす
- ③ 「現場を大切にしたい」変革を進める
- ④ 産業の「デザイン産業」化をはかる
- ⑤ 差別のない「開かれた地域」をめざす

ということである。このポリシーの施策として、29項目の小国アクションが提唱されているが、特に「ひとの誘致に努める」（人材の確保）に着目してみよう。「小国町は企業誘致、施設誘致だけでなく、個人の誘致にも目を向けたい。意欲や才能のある人間が一人でも増えることがこの小さな町では大きな力となる。そして、小国町が気に入る、ひんばんに出入りし、あるいは住みついて地域の発展に寄与してくれるような人の誘致に努めていく」と記されている（熊本県小国町、1991）。

ここには、頭数の多寡やその増減の大きさのみを問題にする〈人口本主義〉とは一線を画する姿勢がメッセージ化されている。上記の太文字で記した箇所は正に筆者らの提唱する〈誘致されるかけがえのない外部者〉、すなわち〈ハビタント〉の具体的イメージそのものである。そこには人の頭数というマスではなく、外部参入者一人ひとりが持つかけがえのなさ、個性や多様性、自発性などの「質」に着目し、各々を大きな人的価値として評価する考え方への頭の切り換えがある。この

意味で「人の誘致」の有力な候補者は、このような外部参入者＝ハビタントであるとする信念と期待が小国アクションには盛り込まれていると解釈できる。このようなアクションは着実に一定の効果をもたらしつつあるように考えられる。すなわち、本町には外部からユニークで行動力のある外部者の参入が顕著に見られる。

以下、外部からの移住者、あるいは、たびたび訪れている人物の実態と背景、目的・理由等について実証分析してみよう。

3-4 小国町の外部参入者の実態

1996年(平成8年)3月及び1997年(平成9年)1月の数日をかけて小国町の実態調査を行った。小国町役場はもとより、(財)学びやの里、商店街、芸術家集団などの協力を得て、外部参入者と目される60人余りの一覧リストを作成した。その中から20人余りの人々にコンタクトを取り、聞き取り調査を行った。その後、電話や郵便などを介して、数回にかけて、フォローアップのための情報収集や照会、確認を繰り返した。

その結果、特徴を有すると判断される22名(A～V氏)を精査し、外部参入者の同定を行った。各外部参入者ごとに調査した項目は、次の7項目である。①家族、住居など、②職業、勤務地、③小国町移住・参入前の居住地、④小国移住・参入のきっかけ、⑤仲介者、移住・参入理由と目的、⑥移住後・参入後のライフスタイル、⑦移住者のチェック機関の有無、である。このうち、①から⑦までの項目についての調査結果の要点を記したものがTable 1(その1～4)である。

以下、①から⑦までの項目について検討する。

(1) 外部参入者のタイプと参入・移住時期

外部参入者には、住居を構える移住者が17人と、たびたび訪れる(が居住していない)者が5人の、都合二つのタイプが存在する。この移住者の中には、もともとは、たびたび訪れる者であった人が、そのうちに住居を構えて、結果的に移住者になったケース(5人)が含まれている。

(2) 年齢構成と出身地

外部参入者の年齢構成としては、20代と40代が中心であるが、20代から70代までと広範に分

布している。具体的には、20代が7人、30代が3人、40代が7人、50代が1人、60代が3人、70代が1人である。このうち女性は4人含まれている。

外部参入者の多くの出身地は、西日本に分布している。特に、九州地方の出身者が大部分を占める。西日本以外の出身者には、東京が3人、千葉が1人、さらに英国が1人の、計5人がある。

(3) 家族構成と住居形態移

住者17人の家族構成としては、夫婦のみの2人家族、及び夫婦と子供の3～5人家族が最も多い。具体的には、独身者が4人、単身赴任者が3人、夫婦が5人、夫婦と子供(3～5人家族)が5人、となっている。

移住者の住居形態は、家族構成や年齢に深く関わっている。一戸建て空き家、及び一戸建て持ち家が最も多い。移住者の住居形態の希望は一戸建て空き家が多い。しかし小国町では、所有者が空き家を外部参入者に貸したがらないために、一戸建て空き家の数が少ないのが現状である。具体的には、一戸建て空き家が5人、一戸建て持ち家が5人、民間アパートが3人、町営アパートが4人である。

(4) 職業と勤務地・居住場所

移住者の職業を見ると、手に職(技術)を身につけた芸術家や職人等、店や美術館や会社等の経営者、美術館学芸員や役場の英語関連職員といった特殊な知識従事者、脱サラ型の一次産業の従事者等である。また、農林業に携わっている人たちもいるが、彼らは小国町に移住するまで、農業の経験はなかった。他方、たびたび訪れる者の職業を見ると、役場等の仕事に関わる建築家や地域計画家、及びカメラマンや詩人などの芸術家である。

移住者の勤務地としては、芸術家や職人等の創作活動に携わる者は小国町である。また、店や美術館や会社経営者等も小国町である。芸術家・職人や経営者等の顧客や取引先などは、熊本や福岡を中心に全国に広がっているため彼らは町外に出かける機会が多い。さらに、農業者は米や野菜を福岡や大分等の会員へ産地直送をしている関係から毎月1～2回は福岡や大分等へ出かけている。なお、小国町から福岡市内や熊本市内へは、車で約1時間30分で行ける。

移住者の居住場所として宮原地区が多い。具体的には、北里地区の木魂館周辺が2人、木魂館周辺以外の北里地区が1人、西里地区が4人、宮原地区が6人、上田地区が4人である。

(5) 移住と参入前の居住地

小国町移住前の居住地として、九州地方が多い。具体的には、福岡県が6人、熊本県が4人、大分県湯布院町が2人、大分県天瀬町が1人の計13人が九州地方である。東日本は2人で、海外

は1人である。他方、たびたび訪れる者の居住地としては、東京をベースとして全国で活動している者が2人、及び熊本県長陽村をベースとして県内で活動している者、南小国町をベースとして小国町で活動している者、熊本県をベースにして県内・全国で活動している者が各々1人である。

(6) 移住者とたびたび訪れる者の参入のきっかけ

外部からの移住者とたびたび訪れる者としては、小国町のイメージや宮崎町長や江藤館長等の

Table 1 (その1-a) 小国町の外部参入者の実態 (その1-bと各行が対応)

外部参入者	家族、住居など	職業、勤務地	小国町移住・参入前の居住	小国町移住・参入のきっかけ
〈A氏〉 1986年西里地区に移住、大分出身	・本人40歳位、奥さん、長男高3、次男中3、長女小6 ・一戸建て住居と別棟 工房の借家	・木工芸家 ・オーダー家具の「鋼工房」 ・制作活動は自宅横の工房	・大学卒業後、東京で工業デザイナーとして会社勤務 ・その後宮城県に居住し職業短大で教えていた ・雑務に追われ制作活動が思うようにできないため移住	・工房と自然環境を重視し東北や北海道の移住先を探した ・友人に紹介されて、小国町を知った
〈B氏〉 1992年10月北里地区に移住、福岡出身	・本人71歳、奥さん ・息子さんは福岡在住 ・一戸建て住居と音楽ホールの所有	・音楽家 ・リコーダー、コーラス、演奏の指導 ・ASO音楽ホール、福岡、大分などへの指導	・東京からUターン。福岡県に30数年居住しリコーダー、コーラス、演奏の指導 ・国内外でコーラスや古楽音楽の演奏旅行を行っていた	・中川氏から小国町に良いホールがあると聞いて訪れた。森林組合と企画班が対応。自分が古楽音楽を演奏するホールを探し、演奏するホールを作るために
〈C氏〉 1996年4月北里地区に移住、福岡出身	・本人46歳、奥さん31歳、陶芸家 ・広島県出身、長女4歳・一戸建て住居の持ち家、借地	・リコーダー演奏家、木工クラフトマン、そばうち職人 ・ASOホール、木魂館、福岡等	・広島県大和町の古い保育園の建物を借り8年間居住 ・大和町は水不足多発で生活がしづらいし、地元がよそ者を受け入れないために移住を決めた	・88年音楽祭で初めて訪れ、その後数回訪れた ・叔父が92年移住後、年に4回位訪れるようになった ・小国町は活気があり地元の人も考えながら生活しているから移住を決めた
〈D氏〉 1995年北里地区にアトリエ、東京出身	・本人54歳 ・普段はアトリエにお弟子さんあるいは三女が滞在	・詩人 ・自費出版も含めて約50冊発行 ・全国を講演や展覧会の旅で回る	・居住は東京浅草で、奥さんと子供が住んでいる ・20歳時に対人恐怖になり日本列島を約10年間放浪した	・92年2月21日に熊本県民テレビの番組撮影で初めて小国町を訪れた ・小国の人（特に江藤氏）と自然の印象が強烈だった
〈E氏〉 1989年頃から木魂館や小国町をたびたび訪れる、熊本長陽村出身	・本人40歳、奥さん38歳、長男14歳、次男12歳、三男10歳、両親 ・長陽村に一戸建て住居と別棟事務所を所有	・カメラマン。 主に県内の自治体の仕事 ・目標は九州や東アジアを映像にまとめること	・83年春に7年間居住した東京からUターン ・以降長陽村で15年目 ・Uターンしてから約15年、熊本津奈木町、熊本水上村や大分湯布院町にもたびたび訪れている	・85年頃「とっほす」雑誌で小国町や江藤氏を知る ・その後、熊本県イベントのスライド会が木魂館で開催されたときに初めて小国町を訪れ、江藤氏に会った
〈F氏〉 1996年宮原地区にアトリエ建設、小国町出身	・本人68歳、単身赴任 ・一戸建て住居兼アトリエ所有・現在、奥さんは湯布院町居住	・彫刻家 ・小国町のアトリエを中心に制作活動 ・作品は小国町を初め国内外に展示	・東京で30年暮らし、その後湯布院町で15年暮らしした ・96年にアトリエ建設 ・湯布院では末田美術館、アトリエ、住居を所有 ・湯布院町は観光化し、また、アトリエも手狭になった	・由布岳に登った際に霧の中にふるさと小国町のイメージが見えた ・85年「美術フェスティバル」参加への連絡があった ・作品を小国町に残すために移住を決めた

Table 1 (その1-b) 小国町の外部参入者の実態 (その1-aからの続き)

仲介者、移住・参入理由と目的	移住後・参入後のライフスタイル	チェック機関
<ul style="list-style-type: none"> 仲介者は小国町を知っていた友人 役場企画班に移住の相談に行き、別棟になった住居と工房を探してくれた 環境と建物が気に入り移住を決めた 家具製作、木工クラフトの学校、木工研究所を作りクラフトマンの養成 	<ul style="list-style-type: none"> ヨーロッパ調の椅子、テーブル等の家具製作 夏期は自給の野菜を作る 木工仲間が近くに移住した 木工仲間のネットワークづくりのため「木考通信」発行（悠木の里づくりの町補助金を受けている） 多くのお客さんが工房を訪れる 	<ul style="list-style-type: none"> 移住者のチェック機関通さず 住民登録あり、小国町 Jターン
<ul style="list-style-type: none"> 仲介者は熊本の中川氏 家畜市場や小国ドームなど古楽器に適した良いホールがある 杉林や空気に囲まれた自然環境が古楽器演奏に最適 	<ul style="list-style-type: none"> おぐに音楽祭の開催など年4回の演奏会 おぐに音楽祭の10回開催以後はオペラを開催したい 町内の人たちを中心にリコーダー演奏の指導 ピクニック等自然散策や地元の人たちとの交流が楽しい 木魂館の文化講演会等のイベントにも参加している 	<ul style="list-style-type: none"> 移住者のチェック機関通さず 住民登録あり、小国町 Iターン
<ul style="list-style-type: none"> 叔父のB氏に相談し、木魂館の江藤氏と役場企画班に移住の相談に行った 演奏活動、木工づくり、そば打ち。ASOホールで「そば処岩河」を開店し、そば打ち講習会を開きたい 	<ul style="list-style-type: none"> 木魂館での文化講演会や交流会に参加している 「森とワインと音楽」ミニ演奏会に参加と協力 バランの年越しそば屋に参加と協力 子供リコーダーの指導や町内小学校の演奏巡回 奥さんは陶芸窯をつくり、陶芸教室を行う予定 しの笛・津軽三味線 リコーダー等のコンサートを年1回は開催したい 	<ul style="list-style-type: none"> 移住者のチェック機関（育才舎）通す 住民登録あり、小国町 Jターン
<ul style="list-style-type: none"> 仲介者はテレビ局スタッフ アトリエにいるとホッとする 一番街の人たちらの支援で93年7月「須永博士作品館」がオープン 95年北里地区にアトリエ建設 	<ul style="list-style-type: none"> アトリエで創作活動。小国町には人間の生きる原点、優しさ、自然と子供たちの姿がある 旅先に江藤館長や北里康二氏らが迎えに来てくれたり、アトリエにいると誘いの声がかかる 木魂館の文化講演会やイベントなどに参加している 	<ul style="list-style-type: none"> 移住者のチェック機関通さず 住民登録なし、東京浅草
<ul style="list-style-type: none"> 仲介者は熊本県職員 木魂館には江藤氏、河津郁子さんらがいるから行く。役場には宮崎町長や松崎氏らがいるから行く 認知されている居心地のよさ、自分の生き方が考えられる、自分自身や社会が広く見ることができる 	<ul style="list-style-type: none"> 木魂館の文化講演会やイベント等へ参加している 毎月2回位は木魂館を訪れている 小国町や地元の人たちに対して、映像や写真を通して地元の良さの再発見に協力している 江藤氏から具体的な相談事があるときにE氏にネットワークを活かして対応している 	<ul style="list-style-type: none"> 参入者のチェック機関通さず 住民登録なし、長陽村
<ul style="list-style-type: none"> 仲介者は宮崎町長と江藤氏 小国町の制作はリラックスできるためアトリエを建設したいと思った 小国町の子供たちに創作や文化のエネルギーを伝えたい 小国町の子供たちに生まれ育ったふるさとのよさを伝えたい 	<ul style="list-style-type: none"> 93年「ぬる湯シンポ」に関わって若い彫刻家と一緒に制作したのが小国町で創作活動をしたのが始まり 町や木魂館等の講演会やイベント等に参加している 今後アトリエを中心に野外美術館構想を実現したい 子供の頃遊んだ溜池やその周辺の場合のイメージがアトリエの場に反映されている 	<ul style="list-style-type: none"> 移住の際にチェック機関通さず 住民登録なし、湯布院町 Jターン

Table 1 (その2-a) 小国町の外部参入者の実態 (その2-bの各行に対応)

外部参入者	家族、住居など	職業、勤務地	小国町移住・参入前の居住	小国町移住・参入のきっかけ
〈G氏〉 1994年宮原地区に移住、岡山出身	<ul style="list-style-type: none"> 本人62歳、奥さん 宮原地区の町営アパートに居住 北里地区に美術館所有、借地 	<ul style="list-style-type: none"> 組木の館「ズートピア」経営 組み木館は北里地区 当初はウッディタウンでギャラリー経営 	<ul style="list-style-type: none"> 岡山の画廊喫茶経営から、大分県湯布院町で7年間居住し、美術館を経営 湯布院町は多数の観光客が訪れ騒がしくなったから移住を決めた 	<ul style="list-style-type: none"> 九州、四国、中国で移住先を探していたところに、宮崎町長のキャッチフレーズ「よそ様の土地に夢を描こう」が目にとまって小国町を訪れた
〈H氏〉 1991年北里地区に移住、熊本出身	<ul style="list-style-type: none"> 本人45歳、奥さん45歳、佐男21歳と三男16歳。次男18歳は熊本の実家に居住 北里地区目平に一戸建て住居と宿泊施設所有 	<ul style="list-style-type: none"> 「ダブルプラン」不動産業等、宿泊業「木魂館」奥さん経営 不動産事務所は宮原地区ウッディタウン 宿泊業は目平 	<ul style="list-style-type: none"> 熊本市内に居住し、熊本県警の警察官を務める 警察官時代の新聞情報整理の仕事から小国町記事が多いのに興味を抱いた 1991年に北里駐在所の勤務を希望し単身赴任 	<ul style="list-style-type: none"> 1994年4月に奥さんと三男が北里地区目平に移住 小国町には「夢」がある 宮崎町長や江藤氏の人柄にひかれた
〈I氏〉 1991年西里地区に移住、福岡出身	<ul style="list-style-type: none"> 本人63歳、奥さん、娘さん 奥さんと娘さんは太宰府に居住 西里地区中尾に一戸建て住居、アトリエ、牧場等所有 	<ul style="list-style-type: none"> 「(株)福岡ニット」経営 小国町の「羊ガ岡牧場」 仕事でよくイギリスやスコットランドに行く(編み物ニットのふるさと) 	<ul style="list-style-type: none"> 1973年太宰府に居住 (株)福岡ニット本社は筑紫市にある I氏は編み物ニットに48年間携わっている 「ニコットファーム」構想はI氏のライフワーク、長年やりたかった「夢」 	<ul style="list-style-type: none"> 以前から「ニコットファーム」構想を実現するため福岡周辺の場所を探していた 1990年頃松本氏(小国町出身、太宰府在住)に「ニコットファーム」構想を話し、一緒に小国町を訪れた その後農協の堤氏と宮崎町長を紹介され、I氏の夢を語ったときいていねいに対応してくれた
〈J氏〉 1995年宮原地区に移住、福岡出身	<ul style="list-style-type: none"> 本人28歳、M.S.さん27歳埼玉出身 上田地区に一戸建て住居の借家 	<ul style="list-style-type: none"> 1995年12月から一番街商店街「一目屋」生活雑貨店経営 店舗は借家 	<ul style="list-style-type: none"> 福岡県に約7年居住 その後、田舎で生活雑貨店を開くために移住を決めた 小国町にはドライブで来たことはある。田舎で気持ちがいいところだと思った 	<ul style="list-style-type: none"> 福岡県内を探していたところ、知人から黒川温泉を紹介された 最初の住まいは宮原地区一番街、店は南小国町の瀬の本に4カ月間あった
〈K氏〉 1994年西里地区に移住、東京出身	<ul style="list-style-type: none"> 本人48歳、独身 西里地区岳湯に居住(借家) 	<ul style="list-style-type: none"> レストラン「そらいろのたね」経営 宮原地区に店舗の借家 	<ul style="list-style-type: none"> 東京農大卒業後、8年間ネパールやインドで仕事 福岡県浮羽町で12年間、地鶏平地飼等をした 1994年に(株)福岡ニットに入社し小国町を訪れることになった 	<ul style="list-style-type: none"> (株)福岡ニットに入社し小国町工場へ派遣され、小国町工場で働くために福岡に居住しているとき、小国町には観光で何度か訪れたことがあった

Table 1 (その2-b) 小国町の外部参入者の実態 (その2-aからの続き)

仲介者、移住・参入理由と目的	移住後・参入後のライフスタイル	チェック機関
<ul style="list-style-type: none"> ・ 役場企画班に移住の相談に行き、その後、江藤氏から北里地区カントリーパーク計画を見せられて移住を決めた ・ 豊かな環境のところで美術館を経営し、体験工房をつくる ・ 田舎は商売するには目立って都合がいい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1994年3月～4月に小黒三郎の展覧会を開催 ・ 木魂館の交流会や文化講演会等に参加している ・ 組木の館ズートピア入館者は3万人を達成し、バスツアーが入るようになった ・ 「387ネットワーク」や「水曜会」に参加し、観光に力を入れている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 移住者のチェック機関(育才舎)通す ・ 住民登録あり、小国町 ・ Iターン
<ul style="list-style-type: none"> ・ 仲介者は特にいない ・ 小国町にはリーダーの割合が他より多くて、進歩的で人間的に充実していると思う ・ 小国町を知るために小国を訪れた ・ 警察官の退職後の生活を考えるため小国町を訪れた ・ 母親のリウマチ治療のために温泉活用 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 露天風呂やログハウスキットを自分で作った ・ 不動産屋のお客さんは福岡、大分、熊本が多い ・ 住んでいる集落の付き合いは冠婚葬祭など最小限 ・ 居住地では烏骨鶏やアヒル等を飼育している ・ コンピューター技術を活かし、パソコン通信やワープロ教室などで教えていた ・ 毎年1回タイのチェンマイに旅行をしている。今後タイと日本の国際交流に貢献したい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 移住者のチェック機関(育才舎)通す ・ 住民登録あり、小国町 ・ Iターン
<ul style="list-style-type: none"> ・ 仲介者は松本氏(小国町西里出身) ・ 豊かな自然環境の中で編羊飼育し、動植物と共存しながら自分の作りたいニットを好きな人たちにつくるこれが「ニコットファーム」構想 ・ 小国町の人情と風土が好き。人なつっこさ、清潔感、心の優しさ、厳しさ ・ 宮崎町長の姿勢が小国町のよいところ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小国町へは太宰府市から毎週2日位の割合で行く。車で約1時間30分位 ・ 空き家と畑と山を購入し、編羊飼育を始め、1997年秋からアトリエで本格的な事業展開が図る予定 ・ 1993年から毎年4月に羊の毛刈りイベントをケヤキ広場で開催している ・ 音楽祭などのイベントにも参加している ・ 住居や牧場管理などは近所の農家に依頼している ・ I氏のネットワークから画家宮嶋喜久夫氏、デザイナーのゴシノヒロコ氏が小国町に訪れるようになった 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 移住者のチェック機関通さず ・ 住民登録あり、小国町 ・ Iターン
<ul style="list-style-type: none"> ・ 仲介者は知人 ・ 一番街朝市で知り合った児玉氏が、空き家の店舗を探してくれた ・ 自然環境が豊かな田舎で生活し、楽しいものを作り、店で売りたい ・ 小国町は移住者にとって住みやすく、よそ者を受け入れてくれるところ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「一目屋」には、近所のおばさんらが集まる ・ 新しい住まいでは、野菜づくりをして花を植えたい ・ 地元の人が野菜を持ってきてくれる ・ 一番街商店街関連の公園や遊歩道整備等の会合に参加するが、地元の人たちと意見が衝突したりする ・ 住まいのある集落では組に入っていないが、ゴミ清掃などの共同作業には参加している 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 移住者のチェック機関通さず ・ 住民登録なし、福岡 ・ Iターン
<ul style="list-style-type: none"> ・ 仲介者は(株)福岡ニットのI氏 ・ (株)福岡ニットを退職 ・ 1996年に「そらいろのたね」開店 ・ 大学時代から自給できる食物の提供場所を探していた ・ 宮崎町長は政治家の泥臭さがなく、小国町の顔になっているところがいい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 店と住居物件は不動産屋のH氏に探してもらった ・ 店は移住者のY.M.さんに手伝ってもらっている ・ 店のお客さんには主婦が多く、近所の主婦の溜まり場になっている ・ 外部から参入してきた人たちとクリスマスパーティ等を行っている ・ 住んでいる集落では、年3回道端の草刈をしている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 移住者のチェック機関通さず ・ 住民登録あり、小国町 ・ Iターン

Table 1 (その3-a) 小国町の外部参入者の実態 (その3-bの各行に対応)

外部参入者	家族、住居など	職業、勤務地	小国町移住・参入前の居住	小国町移住・参入のきっかけ
〈L氏〉 1992年5月上田地区に移住、福岡出身	<ul style="list-style-type: none"> 本人37歳、奥さん34歳、大分出身、長男6歳、長女3歳 一戸建て住居(借家) 	<ul style="list-style-type: none"> 自由業兼農業 農業経験なし 畑2反、田1反の借地。田畑は住居周辺と西里地区に分散 農閑期は土建業のアルバイトもする 	<ul style="list-style-type: none"> 福岡市内に4年間居住し、会社に勤務 温泉のある田舎で生活するために移住を決めた 大分耶馬溪、宮崎五ヶ瀬、佐賀等の役場を廻って移住先を探した 	<ul style="list-style-type: none"> 九州の温泉地の田舎の空き家を役場の窓口で探した 小国町に知人がいて、小国町役場企画班を紹介してくれた
〈M氏〉 1995年11月宮原地区に移住、96年上田地区に移住、奈良出身	<ul style="list-style-type: none"> 本人28歳、奥さん33歳(N氏) 1995年11月宮原地区の町営アパート 1996年6月上田地区の一戸建て住居(借家) 	<ul style="list-style-type: none"> 悠木産業勤務・森林作業、作業場所は小国町と周辺 林業経験なし 	<ul style="list-style-type: none"> 熊本市内に3年間居住し、飲食店に勤務 田舎で森林仕事をするために移住を決めた 生まれ育ったところでは、祖父が森林仕事をしており、子供の頃見たことがあった 	<ul style="list-style-type: none"> 全国の森林仕事ができ、会社形態になっているところを探した(未経験で技術がないために) 知人から小国町の悠木産業の情報を得た
〈N氏〉 同上、英国出身	<ul style="list-style-type: none"> 本人33歳、夫28歳(M氏) 1997年4月より八代市へ単身赴任 	<ul style="list-style-type: none"> 小国保育園、開発センター及び八代市の公民館で英語教師 	<ul style="list-style-type: none"> 5、6年前頃に英国から来日、北九州の英語スクール、熊本の英語スクールに勤務 熊本でM氏と知り会う 	<ul style="list-style-type: none"> M氏と熊本で結婚して、一緒に小国町へ移住
〈O氏〉 1996年5月宮原地区に移住、熊本出身	<ul style="list-style-type: none"> 本人27歳、独身 宮原地区の町営住宅に居住 	<ul style="list-style-type: none"> 悠木産業勤務・森林作業、作業場所は小国町と周辺 林業経験なし 	<ul style="list-style-type: none"> 熊本市内の飲食店に勤務 九州など色々な田舎を見て廻った 移住先は場所の美しさより、土地や人の縁を大切にしたいと思った 	<ul style="list-style-type: none"> 悠木産業のM氏が熊本の飲食店で働いているときの同僚 M氏が悠木産業に入り、仕事内容等を聞いて悠木産業に入社を決めて移住した
〈P氏〉 1996年4月宮原地区に移住、福岡出身	<ul style="list-style-type: none"> 本人27歳、独身 宮原地区の町営住宅に居住 	<ul style="list-style-type: none"> 悠木産業勤務・森林作業、作業場所は小国町と周辺 林業経験なし 	<ul style="list-style-type: none"> 高校卒業後就職したが、退職し北海道で酪農を経験 その後福岡の大学を卒業 子供の頃から一次産業が好きで一次産業の仕事がしたかった。近くの魚市場によく遊びに行っていた 	<ul style="list-style-type: none"> 大学卒業後、九州で林業の仕事を探した 熊本県森林連合会から悠木産業を紹介された 悠木産業は会社形態のために収入が安定しているところがよかったので決めた

Table 1 (その3-b) 小国町の外部参入者の実態 (その3-aからの続き)

仲介者、移住・参入理由と目的	移住後・参入後のライフスタイル	チェック機関
<ul style="list-style-type: none"> ・仲介者は小国町の知人 ・役場企画班が空き家情報を提供してくれて、自ら所有者と交渉した ・空き家があり、温泉があり、豊かな自然環境の田舎で暮らしたい ・農業をしたかったわけでもなかった ・生活基盤は自給的にしていきたい ・今後小国町より生活しやすいところがあれば、移住することも考えられる 	<ul style="list-style-type: none"> ・農業を地元農家の方に教えてもらっている ・福岡や大分の会員に農産物の産地直送サービスを行っているため、月に一回は福岡や大分等に行く ・農閑期は家族で近くのスキー場へ遊びに行く ・色々な人が集まれる場を作りたい ・外部からきたO氏やP氏が家を訪れる ・「田舎暮らしネットワーク」の関係で全国から田舎暮らしを希望する人たちが相談に訪れる ・居住集落の共同作業や冠婚葬祭等に参加している 	<ul style="list-style-type: none"> ・移住者のチェック機関通さず ・住民登録あり、小国町 ・Iターン
<ul style="list-style-type: none"> ・仲介者は小国町出身の知人 ・豊かな自然のある静かな田舎、会社形態の森林仕事ができる場所 ・小国町出身の知人が役場を紹介してくれた ・役場が悠木産業と町営アパートを紹介してくれた 	<ul style="list-style-type: none"> ・熊本市内に月1~2回はショッピングに行く ・小国町内の温泉巡りや本を読む ・静かな田舎で生活しながら、将来的に手づくりの家具を作りたい ・小国町は都市と田舎の間にあると思う。今後はさらに山の中に移住することも考えている 	<ul style="list-style-type: none"> ・移住者のチェック機関通さず ・住民登録あり、小国町 ・Iターン
<ul style="list-style-type: none"> ・仲介者は小国町出身の知人 ・豊かな自然のある静かな田舎で暮らすために移住を決めた 	<ul style="list-style-type: none"> ・小国町には八代から週末の土、日に戻り、開発センターや地域等で英語を教えている ・週末は英語を教えている人たち等と集まったり、食事等をする機会が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ・移住者のチェック機関通さず ・住民登録あり、小国町 ・Iターン
<ul style="list-style-type: none"> ・仲介者は悠木産業のM氏 ・悠木産業の仕事をするために ・一次産業の仕事ができればどこでも良かった ・田舎で豊かな暮らしがしたい ・ゆっくりした時間の流れで暮らしたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・林業の仕事は自然の中で気持ちがいい ・林業の仕事はメリハリがあり面白い ・会社や仕事の相談はS課長にしている ・休日にはデートに熊本へ行く ・外部からきた農業のL氏や悠木産業のM氏の家に遊びに行く ・悠木産業で林業を2~3年学んで、小国町よりさらに田舎で自給自足に近い暮らしをするか、あるいは海外へ留学や旅に行くことも考えている 	<ul style="list-style-type: none"> ・移住者のチェック機関通さず ・住民登録あり、小国町 ・Iターン
<ul style="list-style-type: none"> ・仲介者は熊本県森林連合会 ・悠木産業の林業の仕事をするために 	<ul style="list-style-type: none"> ・山の中に入ることが面白い。林業の作業内容が短いサイクルで変わるのが面白い ・仕事をする前の林業イメージは徒弟制度が強いと思ったが、実際はシステム的になっていることで、未経験者でも従事しやすい ・休日は福岡の魚市場に遊びに行ったり、手伝ったりする ・今後小国町に友人や知人ができれば良いと思う 	<ul style="list-style-type: none"> ・移住者のチェック機関通さず ・住民登録あり、小国町 ・Iターン

Table 1 (その 4-a) 小国町の外部参入者の実態 (その 4-b の各行に対応)

外部参入者	家族、住居など	職業、勤務地	小国町移住・参入前の居住	小国町移住・参入のきっかけ
〈Q氏〉 1996年7月南小国町に移住、11月宮原地区に移住、福岡出身	<ul style="list-style-type: none"> 本人25歳、独身 宮原地区の民間アパート 小国町に住居が見つからないために南小国町に住居 	<ul style="list-style-type: none"> 1996年7月から小国町役場企画班 小国町と周辺 	<ul style="list-style-type: none"> 福岡春日市で大学卒業まで居住 米国ニューヨークに約1年半居住 放送局で話す仕事をするために語学学校に通っていた 	<ul style="list-style-type: none"> 知人から両親に小国町が英語のできる職員を募集しているという連絡が入った 小国町ではFM局開設が進められていたので、話す仕事ができる可能性が魅力的だった
〈R氏〉 1995年4月宮原地区に移住、東京出身	<ul style="list-style-type: none"> 本人28歳、独身 宮原の民間アパートに住居 	<ul style="list-style-type: none"> 坂本善三美術館の学芸員 	<ul style="list-style-type: none"> 東京に居住 東京の大学を卒業し、大学に残っていた 	<ul style="list-style-type: none"> 坂本善三美術館館長と父親が友人の関係 そのために坂本善三美術館長から学芸員の話があった
〈S氏〉 1991年5月南小国町にUターン、南小国町出身	<ul style="list-style-type: none"> 本人30歳、独身、父親55歳、母親58歳、祖父88歳、祖母86歳 一戸建て持ち家 	<ul style="list-style-type: none"> 小国町役場臨時職員 木魂館職員 勤務場所は北里地区中心 	<ul style="list-style-type: none"> 熊本の高校卒業後、佐賀の短大卒業 熊本で5年団体職員、福岡で1年間生花店に勤務 	<ul style="list-style-type: none"> 実家の仕事を手伝うため、南小国町にUターン 1991年6月から小国町役場臨時職員、1992年1月から木魂館勤務、1996年4月から(財)学びやの里勤務
〈T氏〉 1992年1月宮原地区に移住、大分天瀬出身	<ul style="list-style-type: none"> 本人24歳 奥さん(1996年9月結婚) 宮原地区の民間アパートに住居 	<ul style="list-style-type: none"> 悠木産業勤務 森林作業、作業場所は小国町と周辺 林業経験なし 	<ul style="list-style-type: none"> 高校卒業後、天瀬町の実家から日田の運輸会社勤務 三交代勤務で生活が不規則なために退職 	<ul style="list-style-type: none"> 父親が製材関係の仕事に従事していた 父親から知人の悠木産業笹原課長に連絡を入れてもらった
〈U氏〉 1986年頃から小国町をたびたび訪れる、福岡出身	<ul style="list-style-type: none"> 本人44歳、奥さん、子供2人、奥さんの両親 熊本市内の一戸建てに住居、持ち家 	<ul style="list-style-type: none"> 建築家 熊本大学講師 大学と県内が中心。国内外 球磨村や坂本村等にもたびたび訪れている 	<ul style="list-style-type: none"> 福岡から大学入学のために熊本市へ居住 大学院修了後アメリカで1年留学、熊本大学で1年間、八代高専で10年間(熊本大学講師兼)、91年4月から熊本大学で教鞭をとる 	<ul style="list-style-type: none"> 1977年頃小国町の北里柴三郎博士の生家等の設計競技で1等になり、小国町を訪れた 設計競技の仕事は都合で代わり、その後林野庁木造建築事業に町長に勧められて関わる それが木魂館の設計だった
〈V氏〉 1989年から小国町をたびたび訪れる、千葉出身	<ul style="list-style-type: none"> 本人50歳位、95年4月一の宮町に移住(単身赴任) 奥さんと子供3人(一番上は大学生)は東京居住 	<ul style="list-style-type: none"> (財)阿蘇環境デザインセンター 地域計画家 一の宮町を含む12町村広域、阿蘇郡、県内中心 	<ul style="list-style-type: none"> 高校から東京に在住し、地域計画コンサルタント会社経営 1995年4月から(財)阿蘇環境デザインセンター勤務のため移住を決めた 	<ul style="list-style-type: none"> 1989年頃「小国ニューシナリオ」策定のため、先輩の地域計画コンサルタントに連れてこられて小国町を訪れた その時に小国町を初めて訪れた

Table 1 (その 4-b) 小国町の外部参入者の実態 (その 4-a からの続き)

仲介者、移住・参入理由と目的	移住後・参入後のライフスタイル	チェック機関
<ul style="list-style-type: none"> ・ 仲介者は知人の長尾氏 (福岡市役所) ・ 役場職員で英語の通訳等の仕事をするために 	<ul style="list-style-type: none"> ・ お客さんが外国から訪れた時の通訳や海外で紹介するために英文の書類等作成 ・ 企画班の仕事だけでなく、健康祭りなどイベントの司会や地区のワークショップ等へ参加 ・ 毎週金曜日の夕方は天神 FM 局のディスクジョッキーをしている ・ 江藤氏や役場の人たちが面倒を見てくれる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 移住者のチェック機関通さず ・ 住民登録あり、小国町 ・ I ターン
<ul style="list-style-type: none"> ・ 仲介者は坂本善三美術館館長 ・ 坂本善三美術館の学芸員をするために移住を決めた 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 仕事内容は美術館 ・ 作品の解説や企画立案と実行等 ・ 97 年 4 月から 1 年間予定で美術館主催の絵画教室開催 ・ P ホールの展示等を手伝っている ・ コンサート実行委員会に入り活動している ・ 木魂館の文化講演会やイベントにも参加している 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 移住者のチェック機関通さず ・ 住民登録あり、小国町 ・ I ターン
<ul style="list-style-type: none"> ・ 仲介者はいない。特に目的はない ・ 小国町役場臨時職員をしている時に、江藤館長から木魂館で働かないかと声をかけられた 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文化講演会やイベント等で地元や外部から訪れる人たちと関わりができた。外部からたびたび訪れることが多い ・ 仕事内容は地域振興事業 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 移住者のチェック機関通さず ・ 住民登録なし、南小国町
<ul style="list-style-type: none"> ・ 仲介者は父親 ・ 悠木産業の仕事をするために移住を決めた ・ 将来は父親と兄と一緒に事業をやりたいと考えている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会社の人たちとは、酒を飲みに行くなどの付き合い ・ 休日は毎月 2~3 回日田に買い物に行く ・ 天瀬町の先輩たちと付き合い合っている ・ 町営住宅に引っ越し予定 ・ 住んでいるところの共同清掃等は参加している 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 移住者のチェック機関通さず ・ 住民登録あり、小国町
<ul style="list-style-type: none"> ・ 仲介者は日本建築学会九州支部 ・ 設計等の仕事をするために ・ 日本の未来が見たい。小国はその可能性を秘めていると思う ・ 小国町の人とは外部の人とお互いに飽きない関係を築いている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 設計監理等の業務で地域の施設をつくらせている ・ 田畑を借りて米や野菜を学生と作っている。収穫したもので地元の人たちとバーベキューパーティなどをする ・ わざわざ熊本から小国にコンサートや芝居を見に来る ・ 外部から入ってきた人たちで新たに北里地区の自治会組織の第 5 部をつくらせている ・ 平均すると週に 1.5 回位は小国町を訪れている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 移住者のチェック機関通さず ・ 住民登録なし、熊本市
<ul style="list-style-type: none"> ・ 仲介者は先輩の地域計画コンサルタントの森戸氏 ・ 1989 年頃から「小国ニューシナリオ」のハード部門策定のために ・ 1992 年から土地利用計画とコミュニティプラン策定のために 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 役場の委託で土地利用計画とコミュニティプラン策定に関わった。各地区土地利用計画チームと一緒に計画を策定した。この頃、月に 1~3 回位小国町を訪れていた ・ 熊本県一の宮町に移住してからは小国町に月 1~2 回位の割合で酒を飲む等息抜きに訪れている。場合によっては町長等から相談を受けることもある 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 移住者のチェック機関通さず ・ 住民登録なし、一の宮町

行政のキーパーソンに魅力を感じた人たちが多
い。また特に、九州地方に絞って豊かな自然環境
の場所を探していた〈田舎・ふるさと志向〉の人
たちが多。他方、たびたび訪れている者はすべ
て、偶然に小国町を訪れたことや宮崎町長と江藤
館長等の魅力がきっかけに訪れた人たちである。

(7) 外部者と内部者をつなぐ仲介者

小国町では、宮崎町長や江藤館長、役場企画
班、木魂館等が、外部者の参入のきっかけづくり
をしたり、窓口・仲介者的な役割を果たしている
ケースが少なくない。しかし、それが全てではな
く、不動産業の和田氏、そして、一番商店街の児
玉氏なども仲介的な役割を果たしている。さら
に、小国町出身の町外在住者や小国町住民が外部
参入者のきっかけづくりの役割を果たしている
ケースも見受けられる。

(8) 小国町の参入・移住の理由と目的

主な外部者の参入・移住の理由としては、「宮崎
町長や江藤館長等の人情や豊かな自然環境が気
に入った」、「商売や事業等を展開するため」、「役
場、悠木産業、美術館に勤める、あるいはそれら
に関わる業務を行うため」などが挙げられる。

具体的には、「豊かな自然環境で創作・制作活
動をする」が4人、「豊かな自然環境で田舎暮ら
しを楽しむ」が2人、「商売や事業等を展開する」
が5人、「宮崎町長や江藤館長等の人情や豊かな
自然環境が気に入った」が5人、「役場・悠木産
業そして美術館に勤める、あるいはそれらに関わ
る業務を行う」が6人である。

(9) 移住・参入後のライフスタイル

小国町の持つ自然の豊かさと、地元の人たちと
交流できる開かれた環境をエンジョイするライフ
スタイルに切り換えた人が大半である。このよう
な、自然の豊かさに、人々との交情（交流）とい
う味付けがなされた「まるごとの環境の豊かさ」
を高く評価する移住者と参入者が多。

例えば、芸術家や職人等は、豊かな自然環境の
中で、創作活動を行っている。田舎暮らし派の人
たちは、豊かな自然環境の中で、野菜等をつくり
自給的な生活を楽しんでいる。また、田舎の雰
囲気の中で、コンサート、芝居や文化講演会、交
流会等のイベントに参加して文化的な生活を楽し
んでいる。さらに、買い物や仕事の関係から月

に1、2回以上は福岡や熊本等に出かけている。一
方、外部の知人や友人等も小国町を訪れている。

(10) 移住者のチェック機関

小国町には、移住希望者の移住後の生活プラン
を事前に審査し、トラブルを起こさないようにす
るために、移住者の事前チェックをする機関があ
る。例えば、北里地区の「育才舎」(いくさいしゃ)
は、北里地区のコミュニティプランニングチーム
であり、メンバーは地元住民24名の30~40代
の若者が中心で、職業は会社員、公務員、自営業
等であり、それに役場のコミュニティプラン推進事
業の地区の担当者6人が加わっている。ただし、
行政が窓口になって移住希望者を事前チェックし
選択しているのではない。また、全ての地区に移
住者のチェック機関があるわけでもない。チェッ
ク機関のない地区は、役場などの公的機関や地区
の名士が事前の仲介者的役割になり、間接的に集
落への信用や保証機関の役割を果たしている。こ
のために事前の「地ならし」ができており、移住
後においても、移住者が地域の中に入り込み、交
流しながら円滑に生活することが可能になってい
ると判断される。

(11) 移住者の住民登録の有無

小国町に移住している多くの人たちは、住民登
録を小国町に移している。しかし、2人だけは移
住前の居住地の住民登録になっており、人口登録
の上では、小国町の「住民」ではないが、地域で
は重要な役割を演じている。

3-5 外部参入者が地域に与えつつあるインパクト

次に、外部参入者が地域に与えつつある影響に
ついて考察してみよう。具体的には、①受け入れ
者が外部参入者にどのような役割を期待している
のか、②外部参入者と受け入れ者との接触にどの
ような機会や場があるのか、③外部参入者が地域
にどのようなインパクトを与えつつあるのか、の
3点について考察する。これら3点について現時
点(1997年(平成9年)6月)で、何らかの影響
が認められるA~V氏について、追加的インタ
ビューを実施した(Table 2)。

ただし、本稿は、現時点における、しかも筆者
自身の理解に基づく記述であることを断っておか

ねばならない。外部参加者をめぐる事態の推移によっては、再検討が必要になることも十分に考えられる。また、筆者以外の視点をも取り入れて、より多面的な考察に深化させていくことは、今後の課題でもある。

(1) 受け入れ側が外部参加者にどのような役割を期待しているのか

小国町の行政サイドは、特に、移住者の人口を

無理に増やすこと及び地域振興を促進することは期待していないとコメントしている。小国町の地域づくりは経済効果第一主義ではなく、地域の個性と魅力を向上させることが目的であるとされる。外部参加者には地元溶け込んでほしい、外部情報を提供してもらいたい、個性的なライフスタイルを提案してほしい、創造的な生活基盤づくりに取り組んでほしい、等が外部参加者への期待である。

Table 2 外部参加者が地域に与えつつあるインパクト

外部参加者	受け入れ者が外部参加者にどのような役割を期待しているか	外部参加者と受け入れ者との接触の機会や場づくり	外部参加者が地域にどのようなインパクトを与えつつあるか
1. 〈A氏〉	・木工芸家ネットワークづくり、活動拠点づくりや人材育成等に期待	・子供の学校等関係での接触 ・集落では最小限の付き合い ・移住者との積極的な接触	・木工仲間が近くに移住してきた ・九州木エネットネットワーク木考通信発行 ・お客さんの多くが工房を訪れる
2. 〈B氏〉	・小国町で音楽に気軽にふれ合う機会や場づくりに期待	・リコーダー演奏等の指導で接触 ・古楽音楽祭等のコンサート	・小国町で聴くだけの音楽から、演奏し楽しむ音楽が根をおろしつつある ・年間4回のコンサート等が定着している
3. 〈C氏〉	・リコーダー等の演奏指導 ・小学校の巡回コンサートへの期待 ・奥さんの陶芸教室開催への期待	・木魂館の文化講演会や交流会等のイベントへの参加 ・地元や移住者との積極的な接触	・ASOホールで「そば処岩河屋」の開店 ・和源窯をつくって制作活動 ・芸術家夫婦のライフスタイルが文化の風を送る
4. 〈D氏〉 5. 〈E氏〉	・自分たちの技術、価値観や感性が多岐の小国の人たちの魅力的な生き方（ライフスタイル）などと響き合うことを期待	・木魂館の文化講演会や交流会等のイベントへの参加 ・アルバイトや近所の人と趣味の写真による接触	・展覧会や講演会等の作品の販売により木魂館の運営資金の一部の確保に貢献 ・作品館やアトリエ建設により多くの観光客が小国町を訪れている
6. 〈F氏〉	・小国の子供たちにふるさとの良さや創作 ・文化のエネルギーを伝える	・シンポジウム等での接触 ・制作活動等の中での接触	・アトリエを建設し、小国町に暮らす人たちと一緒に作品を制作している
7. 〈G氏〉	・観光関係者等へ刺激を与え、観光に力を入れることへの期待	・育才舎等の会議への参加 ・北里ワークショップへの参加 ・地元や移住者との積極的な接触	・借地方式を提唱し地域の外部参加者による荒廃を防止している ・美術館の観光拠点ができ集客が増えた
8. 〈H氏〉	・小国にこだわりを持って移住し、暮らしている姿勢に期待	・不動産（総合サービス）業での接触 ・パソコン教室等での接触	・自然環境の破壊を防ぐことに協力 ・小国町になかった不動産業を創出した
9. 〈I氏〉	・豊かな自然環境でのニット事業活動の試みを参考にした、地元製材所等の新たな事業展開への期待	・羊ヶ岡牧場の管理者等との接触 ・コンサートや芝居等を見に行く ・宮崎町長や江藤館長らとの接触	・コシノ氏や宮嶋氏がアトリエを建設 ・「羊の毛刈りイベント」を提案して、毎年4月のイベントに定着している
10. 〈J氏〉	・商店街活性化等に新鮮な発想等を出して起爆剤となることへの期待	・お客さんや近所の人との接触 ・商店街整備の会議や活動に参加	・公園や遊歩道整備やマップづくり等に参加し、新鮮なアイデアを出している

Table 2 外部参加者が地域に与えつつあるインパクト (続き)

外部参加者	受け入れ者が外部参加者にどのような役割を期待しているか	外部参加者と受け入れ者との接触の機会や場づくり	外部参加者が地域にどのようなインパクトを与えつつあるか
11. (K氏)		・お客さんと外部参加者との接触	・お店が主婦の溜まり場になりつつある
12. (L氏)	・「もっと自分たちの生活を楽しくしながら生きていきたい」という一念発起した主体的なライフスタイルに期待	・地元の人に農業を教えながら農作業に取り組んでいる ・農閑期には土建業アルバイト ・地元や移住者との積極的な接触	・野菜や米を福岡等の知人に産地直入し、それを知った近所の農家が参考にしている ・農閑期に家族でスキー場に行くそのようなライフスタイルが近所で話題になっている
13. (M氏) 15. (O氏) 16. (P氏) 20. (T氏)	・林業作業を通じて小国町周辺の国土・山林保全の一端を担うことへの期待	・仕事を通じた人々との接触 ・田舎暮らし移住者等との積極的な接触	・職場同僚からみて生き方や17時からの時間の使い方等が合理的に見える ・林業仕事でも文化面が大切だと思う。コンサートやイベントに行っている
17. (Q氏)		・町の行事やイベントでの接触 ・江藤館長や移住者でお酒を飲む	・外部者の目で公園づくり等のワークショップに参加している
18. (R氏)		・コンサートの実行委員 ・Pホールでの展示の手伝い ・木魂館での文化講演会等に参加	・美術館主催の水彩画教室を開催したところ、多くの方が水彩画を習い始めた ・内部者や外部者に美術館作品等の解説
19. (S氏)		・木魂館に関わる内外部者との接触 20・30代女性との積極的な接触	・学びやの里や木魂館等の事業運営に重要なスタッフの一人として欠かせないと思われている
14. (N氏)		・保育園や開発センターや居住する集落等で英語を教えている	・N氏の移住後、地元の人たちは英国に興味や関心などを持つようになった
21. (U氏)	・町全体の建築アドバイザーとしての役割を担うことへの期待	・建築設計・監理の業務 ・学生と一緒に野菜や米づくり	・江藤館長らと北里地区の木造2世帯の在宅ケア住宅モデルづくりを試みつつある
22. (V氏)	・土地利用計画やコミュニティプランづくりで現場に入り、行政の一端を担う役割を期待	・各地区土地利用チームの人たち ・役場や町長や江藤館長等と接触 ・コンサートや芝居を見る	・地域づくりコンサルタントの専門家と外部者の目で、まちづくりの新たな考え方や刺激を与えている

木魂館の江藤館長は、個性的な外部参加者の増加により、地元の人たちの生活にこれまでよりも幅が出てきていると述べている。特に、自然環境を大切にしたいという外部参加者は、木魂館周辺に移住してもらっている。

彼らが所有する周辺のアトリエ、音楽ホール、美術館、住宅等を、事前に本人の承諾を得て、木魂館が半公共的に利活用させてもらい地域の人たちにも役だてているということである。

一番街商店街の児玉氏は、外部参加者に対して、いま残っている資源を活用し、一番街商店街

の集客拠点を造るなど、商店街活性化に新鮮な発想を出してもらい、起爆剤の役割を担ってほしいと期待している。また、悠木産業の笹原課長は、林業作業を通じて小国町と周辺、そして国土の山林保全の一端を担ってもらいたいという期待を述べている。

(2) 外部参加者と受け入れ者との接触の機会や場の可能性

多くの外部参加者は、地元住民とのベタリな接触(付き合い)を避け、ある程度の距離をとりながらも必要性のある範囲内での付き合いをしている。一方、多くの受け入れ者は、外部参加者の

このようなスタンスを認めながら外部参加者と接触している。

具体的には、古学音楽祭等のコンサート、文化講演会や交流会等のイベント、集落コミュニティによる道端の草刈の共同作業、趣味や習い事、などが接触の機会や場の例として挙げられる。

(3) 外部参加者が地域にどのようなインパクトを与えつつあるか

外部参加者が地域に与えつつある影響は、①経済的効果と、②社会的効果に大別できる。

①具体的な経済的効果としては、「美術館、作品館、アトリエ等が建設されて観光客が増加した」、「これまで小国町になかった、生活に関わる総合生活サービス業（不動産業）等の新たな事業や商売が創出され、既存産業が活性化した」などが挙げられる。②具体的な社会的効果としては、「ニコットファーム（この詳細は4-1(3)に譲る）の実現等に伴って町外から訪れる友人・知人が増えた」、「小国町では、聞くだけの音楽ではなく、演奏して楽しむ音楽が根をおろしつつある」など、ライフスタイルに幅が出てきたことが挙げられる。その他に、外部参加者が持っている専門的知識技術が小国町のまちづくりに活用されたという事実が確認された。例えば、「建築家や地域計画コンサルタントは、役場職員や住民等に対して、地域特性を活かした建物づくりに貢献した」、「技術・価値観・感性を活かしたコミュニティプランづくりに貢献した」などが挙げられる。このことは図らずも、そのような専門的知識技術を有する人的資源が内部化されたということで、社会的効果はもとより、それが潜めている経済的効果も少なくないと判断される。

以上要するに、現時点では、対象とした外部参加者の大半は、必ずしも「大規模な経済効果や広域的な社会効果」を及ぼしているとは認められないものの、地域社会のライフスタイルやコミュニティづくりのプロセスに概ね良好な社会的影響を与えつつあると推測される。それは一見小さな役割のようであるが、閉鎖的な地域社会に与える波及効果は、将来に対する潜在的経済効果も含めると、相当に大きいものと推察される。

3-6 外部参加者の分類と生活設計の見直し

以下、小国町の実例に即して、①外部者の参入と移住経緯、②外部参加者の参入形態、③外部者の生産スタイル、④外部者の生活スタイル、⑤外部者の将来の生活設計の見直し、という観点から外部参加者の実態にメスを入れることにしよう。これによりハビタントの概念をあぶり出していくことができるからである。Table 3から読みとれる知見を記すと、以下のようになる。

(1) 外部者の参入と移住経緯

外部者の移住と参入までの経緯は、年齢と関係があるようである。20～40代の多くの人たちは出身地やその周辺地域から小国町に移住している。50～60代の多くの人たちは出身地を離れて就学や就業の関係からいくつかの他の地域で居住し、その後、小国町に移住している。一般的に移住者の出身地からみると、Iターンが12人、Jターンが3人、Uターンが2人である。また、参加者の出身地からみると、Iターンが2人、Uターンが3人である。なお、Iターンとは、その地域の出身者ではないが、就学・就業の関係でその地域に移り住んでいる人とする。Jターンとは、その地域の出身者ではないが、他の地域で就学・就業した後、何らかの事情で出身地の近くの地域に移り住んでいる人とする。Uターンとは、その地域の出身者であるが、他の地域で就学・就職した後、何らかの事情でその地域に帰郷し住んでいる人とする。

(2) 外部者の参入形態

外部者の参入形態としては、①「飛び込み型」と、②「呼び込み型」に大別できる。

①「飛び込み型」は、外部者が自主的に小国町を選択し参入してきた場合をいう。②「呼び込み型」は、何らかの誘引が小国町側に設けられていて、外部者は自主的に小国町を選択することが大前提である。例えば、行政のビジョンや施策及び木魂館等のビジョンが目に触れて、小国町を初めて知るきっかけになったり、他の町村と異なった魅力を感じさせた結果、外部者の波長とニーズが一致し、本人が選択的に参入した場合が考えられる。

(3) 外部者の生産スタイル

外部者の生産スタイルは、①「創作活動型」、

- ②「交流・イベント型」、③「事業・商業等型」、④「一次産業型」に大別できる。

①「創作活動型」は、木工芸家、音楽家、彫刻家、詩人等の芸術家タイプの創造的な制作活動等の職業スタイルのことをいう。②「交流・イベント型」は、詩人、カメラマン、美術館経営者等による展覧会や講演会等の活動による職業スタイルのことをいう。③「事業・商業等型」は、会社経営者、店経営者、そして行政、悠木産業等に関わる職業スタイルのことをいう。④「一次産業型」は、主に農林業に関わる職業スタイルのことをいう。

(4) 外部者の生活スタイル

外部者の生活スタイルとしては、①「ひっそり型」と②「にぎやか型」に大別できる。

①「ひっそり型」は、豊かな自然環境をベースに田舎暮らしを楽しんでいる人たちのスタイルのことをいう。②「にぎやか型」は、田舎暮らしと合わせて、行政や木魂館等のイベントに参加し楽しんでいる人たちのスタイルのことをいう。

(5) 外部参加者の将来分類の推察と各ハビタントの判定

年齢的な条件や持ち家・土地所有等から考えて永住する可能性が高いことが推察される。具体的には、各外部参加者の過去、現在の経緯及び将来を推察して、五つのタイプに区分した(Table 3)。

- ① タイプ1は現在、登録居住者、あるいは未登録居住者であって、将来、再度、移住者として他地域へ移住する可能性がある。
- ② タイプ2は、現在、登録居住者、あるいは未登録居住者であって、年齢的な理由から、将来も登録居住者で永住する可能性が高い。
- ③ タイプ3は、現在、たびたび訪れている者であって、将来、再度、移住者として他地域へ参加する可能性がある。
- ④ タイプ4は、現地をたびたび訪れている者であるが、将来的には、登録居住者として永住する可能性がある。
- ⑤ タイプ5は、現在、当該地域の内部と外部に二つの居所を持っている人(登録居住者と未登録居住者)であるが、将来、再度、移住者として他地域へ移住する可能性がある。

- ⑥ タイプ6は、現在、当該地域の内部と外部に二つの居所を持っている人(登録居住者と未登録居住者)であるが、将来は年齢的な理由から、登録居住者として永住する可能性が高い。

以上の6タイプを規定している基本的な要件として、次の二つが挙げられる。(ア) その外部参加者が現時点で、当該地域の内部と外部に二つの居所を持っているかどうか(地理空間軸上の複居住性)、並びに(イ) 過去と現在、あるいは現在と将来にかけて内部と外部に二つの居所を持っているかどうか(時間軸上の複居住性)、である。(ア)の要件を満たす者はセミハビタント(semi-habitant, SH)、(イ)の要件を満たす者はトランスハビタント(trans-habitant, TH)と称することにする(Table 3)。なお、ハビタントの概念のより詳細については後述の4に譲る。

4 外部者参加の促進要因

ここでは、外部者の参加を促進する要因を、小国町の調査結果から抽出して見よう。これにより外部参加者を受け入れるための社会的な仕組みづくりについて、政策論的知見を得ることができであろう。

4-1 外部者の参加要件

(1) 受け入れ側の魅力的な暮らし

まず、外部参加者を受け入れる側の地域や住民が、外部参加者にとって魅力的な生き方やライフスタイルを持っていることが挙げられる。例えば、住民自らが元気である、住民自らが住む地域を主体的に選択している、住民自らが住む地域をデザインしつくりあげている、といった状況が、外部参加者にとっての魅力である。

(2) 外部参加者の主体的な選択、および魅力

次に、外部参加者は、単なる自然や安らぎやノスタルジックな暮らしだけを求めるのではなく、むしろ小国町にこだわりをもって、来てみたい、住んでみたい、地域づくりに参加してみたい、などという主体的な選択(選び取ることを志向し

ていることが、参入が成功する上で不可欠である。

また、会ってみたら面白い、何か誘発されるなど、地元の人たちに対して、何か影響をおよぼすような魅力的な生き方やライフスタイルをしていると感じられる外部参入者が、受け入れ側の住民に歓迎される傾向がある。

(3) 外部参入者と受け入れ者との波長とニーズの一致

こうした外部参入者と受け入れ者とのふれあいを通して、時には摩擦を起こしながらも交流することによって、新しいコミュニティのエネルギーが生まれる。外部参入者と受け入れ者との波長が一致する（共鳴、共振、共感など）、及び基本的にはギブ・アンド・テイク（お互いにどのようなノウハウをもち、何ができるのか。あるいは、相手に何をしてほしいのか）を見いだせることが、

外部者の参入要件として重要である。

例えば、I氏は、受け入れ側の風土と人情を魅力と感じて小国町にこだわってきた。豊かな自然環境の中で綿羊を飼育し、動植物と共存しながら自分の作りたいニットを好きな人たちと作る「ニコットファーム」構想を提唱した。それに対して、受け入れ側は、このような起業の試みが参考になって、地元の製材所等の新たな事業展開への期待につながると考えた。このようにして両者の波長とニーズが一致したことが、I氏が移住し、彼の構想の実現を図る場が生まれることにつながったのである。

(4) チューニング・チャンネルの存在

小国町の例から明らかなように、閉鎖的な中山間地域に外部者が参入するためには、外部者と受け入れ側をつなぐ〈仲介的役割者〉、及び〈仲介

Table 3 外部参入者の分類、将来の分類推察とハビタントの分類

外部参入者	外部者の参入経緯	参入形態	生産スタイル	生活スタイル	将来の分類推察	分類
1. (A氏)	大分→東京→宮城→小国町	飛び込み型	創作活動型	ひっそり型	現在登録居住者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH
2. (B氏)	福岡→東京→福岡→小国町	呼び込み型	創作活動型	ひっそり型	現在登録居住者。将来年齢等で登録居住者として永住する可能性あり	TH
3. (C氏)	福岡→広島→小国町	飛び込み型	創作活動型	にぎやか型	現在登録居住者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH
4. (D氏)	東京→全国展覧会・講演めぐり→小国町	呼び込み型	創作活動型 交流・イベント型	にぎやか型	現在たびたび訪れている者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH
5. (E氏)	長陽村→東京→長陽村→主に熊本県	飛び込み型	交流・イベント型	にぎやか型	現在たびたび訪れている者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH
6. (F氏)	小国町→東京→湯布院→小国町	呼び込み型	創作活動型	ひっそり型	現在二つの居住を持っている人。将来年齢等で登録居住者として永住する可能性あり	SH
7. (G氏)	岡山→倉敷→湯布院→小国町	飛び込み型	事業・商売等型 交流・イベント型	にぎやか型	現在登録居住者。将来年齢等で登録居住者として永住する可能性あり	TH
8. (H氏)	熊本→小国町	飛び込み型	事業・商売等型	ひっそり型	現在登録居住者。将来も登録居住者として永住する可能性あり	TH
9. (I氏)	福岡→福岡→太宰府→小国町	呼び込み型	事業・商売等型	ひっそり型	現在二つの居住を持っている人。将来年齢等で登録居住者として永住する可能性あり	SH
10. (J氏)	福岡→南小国→小国町	飛び込み型	事業・商売等型	ひっそり型	現在未登録居住者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH
11. (K氏)	東京→ネパール・インド→福岡浮羽→小国町	飛び込み型	事業・商売等型	ひっそり型	現在登録居住者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH
12. (L氏)	福岡→小国町	飛び込み型	一次産業型	ひっそり型	現在登録居住者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH

Table 3 外部参入者の分類、将来の分類推察とハビタントの分類 (続き)

外部参入者	外部者の参入経緯	参入形態	生産スタイル	生活スタイル	将来の分類推察	分類
13. (M氏)	奈良→熊本→小国町	飛び込み型	一次産業型	ひっそり型	現在登録居住者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH
14. (N氏)	英国→北九州→熊本→小国町	飛び込み型	事業・商売等型	ひっそり型	現在登録居住者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH
15. (O氏)	熊本→小国町	飛び込み型	一次産業型	ひっそり型	現在登録居住者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH
16. (P氏)	福岡→北海道→福岡→小国町	飛び込み型	一次産業型	ひっそり型	現在登録居住者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH
17. (Q氏)	福岡→米国→小国町	呼び込み型	事業・商売等型	にぎやか型	現在登録居住者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH
18. (R氏)	東京→小国町	呼び込み型	事業・商売等型	ひっそり型	現在登録居住者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH
19. (S氏)	南小国町→熊本→佐賀→熊本→福岡→南小国町	呼び込み型	事業・商売等型	ひっそり型	現在たびたび訪れている者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH
20. (T氏)	天瀬町→小国町	飛び込み型	事業・商売等型	ひっそり型	現在登録居住者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH
21. (U氏)	福岡→熊本→米国→熊本	呼び込み型	事業・商売等型	にぎやか型	現在たびたび訪れている者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH
22. (V氏)	千葉→東京→熊本県一の宮町	呼び込み型	事業・商売等型	にぎやか型	現在たびたび訪れている者。将来再度移住者として他地域へ移住する可能性あり	TH

(注1) 外部参入者の判定によるハビタントの分類としては、トランスハビタント (TH) とセミハビタント (SH) を考えている。詳細は5-1参照。

的役割窓口) が不可欠である。小国町で、このような役割を担っているのが宮崎町長を中心とする役場であり、半外部・半内部的性格を持つ木魂館の江藤館長であると判断される。また、商店街の児玉氏や不動産業の和田氏なども同様の役割を担っていると見えよう。

彼らに代表される役割・機能をもう少し抽象化したモデルとして、〈チューニング・チャンネル〉機構を考えよう。ここでいうチューニング・チャンネルとは、受け入れ側の内部者と外部参入者の出会いを仲介するための「情報処理とミーティングの場づくりのメカニズム」のことである。中山間地域の閉鎖型地域社会は、外部者にとっていわば「取り付くシマのない」シェル型のコミュニティである。チューニング・チャンネル機構は、そのようなシェルに窓口を付け「取り付くシマのある」コミュニティに転換するための情報処理と場づくりのテクノロジーを必要としていると推察される。

(5) 多様なチューニング・チャンネル

先述したように小国町には、宮崎町長、江藤館長、商店街の児玉氏、不動産業の和田氏、役場、悠木産業、木魂館、育才舎等の多様なチューニング・チャンネルが存在している。このチューニング・チャンネルの数(選択の幅)が、多いほどより魅力的な外部者の参入につながる可能性が大きいことを小国町の実例は示唆している。ただし、小国町では、行政が、外部参入者に意識的に着目し、そのための定型的な政策プログラムを導入しているわけではない。

(6) 外部者参入過程の構図

外部者の参入過程は、色々な人物やそれを取り巻く環境と深くかつ複雑に結びついている。しかし、その参入過程は主として、〈外部参入者〉、それを受け入れる側の〈内部者〉、及びそれらを結びつけるマネジメント機能としての〈仲介的役割者・窓口〉の三つの構成要素により規定される。つまり、この三つの構成要素が組み合わさることにより外部者参入のシステムが構築されるとモデル化できよう (Figure 4)。

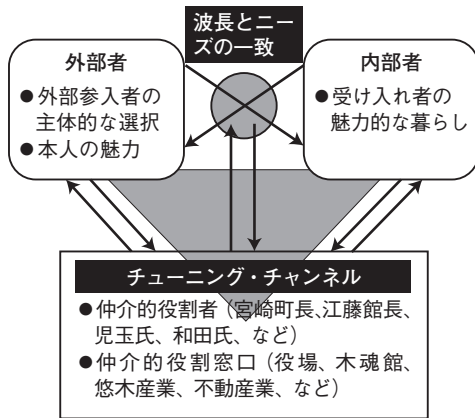


Figure 4 外部参入過程の構図

4-2 外部者参入過程の特徴

(1) 行政は外部参入者を選択してはいない

受け入れ側の行政の言葉によれば、外部参入者を直接選択してはいないということである。これは、自分たちのペースで外部参入者に積極的に接しているだけであるという意味であろう。受け入れ側の方から意識的に住民の生き方やライフスタイルを見せて、相手が選択する有効な情報を提供し、その波長とニーズに合う外部参入者が小国町を選択するというのが行政側の取り組み方である。

しかし、第三者が小国町の外部者の参入過程を見る限り、受け入れ側の行政が、〈小国ニューシナリオ〉と〈小国アクション〉の施策に沿って、外部参入者を歓迎し、間接的にしても選択をしながら受け入れているような一面もある。

なお、筆者らは自論として、これからの農山村は来たい人よりも、来てもらいたい人を選択することが必要ではないだろうかと考えている。その際、重要なことは、行政はあくまでもそのような環境づくりに間接的・側面的に関わり得ても、直接的ではあり得ず、またそれは、必ずしも望ましいことではないということである。

(2) 北里地区は外部参入者を選択している

後述するような北里地区のユニークな取り組みが参考になる。北里地区では〈育才舎〉が外部参入者を選択している。ここに注目したい。

本地区では、移住希望者が殺到する事態になったため、地元住民は1995年(平成7年)から移

住希望者に対して、移住計画の説明を求める検討会を開いている。これは移住後に移住者が積極的に地域と交流し、固有の役割を担う決意を確認するとともに、そのプロセスを通じて住民自身が移住希望者の受け入れ態勢づくりにコミットするという効果を生んでいる。

北里地区の移住希望者の事前チェック検討会の様子を「熊本日日新聞」(1996年(平成8年)1月27日付け)記事の一部から紹介する。

- ・「ここに来て何をしたいのか」、「どんな建物(住居等)を建てるのか」、「どうしてここじゃないといけないのか」。1995年(平成7年)12月に開かれた広島県大和町の古楽器演奏者と陶芸家の夫婦、それに町内の他地区在住の木工芸家との検討会では、北里地区の代表10数人が次々と質問を浴びせた。
- ・古楽器演奏者のCさん(45歳)、陶芸家の奥さん(30歳)夫婦は「地元の人たちが『どんな人が来るんだろう』と考えるのは当然。生涯ここに住むわけだし、検討会は地元の人と顔を合わせる良い機会になった」と話す。また、木魂館の江藤訓重館長(43歳)は「移住希望者が増え『地元住民と交流できる人なのか、地域の将来を一緒に考えていく姿勢を持った人なのか』を、地元としても見極めることが必要になってきた」と言う。検討会には何の強制力もないが、結果的にはCさん夫妻には移住をすすめ、木工芸家には「見通しが甘い」と熟考を促したという。

(3) 受け入れ者は外部参入者を特別扱いはない

小国町では、外部参入者の行政における窓口は企画班である。担当者は、次のようにコメントしている。「小国町の町づくりは『開かれた地域づくり』が目標である。21世紀は人々が広範囲に動き回り、世界中から集まる情報によって自分なりの『暮らしぶり』を創りだして、それが実現できる地域を『選びとる』時代になっていくと考えている。小国町を自己実現の場を選ぶ人を大いに歓迎する。また、外部からのそういった動きは、地域にとっていい刺激になると思う。移住には経済的な自立をはじめそれなりに覚悟が必要である。まずは、私たちの地域や人々をじっくり時間をかけて知ってください。私たちは、可能な限り

情報提供のお手伝いをいたします。しかし、資金や住まい援助など特別扱いしてまで外部者に移住してもらおうとは思っていません」。このように行政は外部からの参入者や移住者に対して、情報提供や出会いの場づくりに一役買っているものの、資金面や住居面で、特別な扱いをしているわけではない。このことは、今後、外部参入者に対して、行政の果たすべき役割を検討していく上で参考になる点と考えられる。

(4) 受け入れ側は外部参入者を束縛しない

受け入れ側の行政や住民は、外部からたびたび訪れる者や移住者に対して、「去るものは追わず、来るものは拒まず」という外部参入者を束縛しないアプローチをとっているようである。これがそれなりに効を奏していると判断される。つまり、一度、外部から移住した人が、永久的に定住するか、あるいは、再度他地域へ移住するかどうかは、外部参入者の自然な選択にまかせられている。これはよく考えてみると、当然のことで外部参入者がそこにとどまり得るか否かを他者がコントロールできるものではない。また、すべきでもなかろう。

(5) 外部参入者に対するアフターケア的コミュニケーション

外部者の参入・移住後の聞き取りから、小国町は“居心地がいい”や“田舎の中の都会”という言葉が多く聞かれた。これらは受け入れ側の仲介的役割者や参入者と接触している人たちが、積極的にコミュニケーションを維持し、外部参入者に対してアフターケアを行っていることを示唆している。このようなアフターケア的コミュニケーションを行っている住民には、Uターン者で、都市と小国町の両方の良いところ、悪いところを経験し知っている人が多い。このような背景を持っている人たちが、外部参入者とふれあひながらアフターケア的コミュニケーションを行っているという点は重要である。

(6) 外部参入者に対する吸引力（誘引力）の核

外部者が参入するには、チューニング・チャンネルと合わせて、外部参入者を引きつける受け入れ側の吸引力（誘引力）の核が重要である。小国町の場合には宮崎町長が吸引力の核で、江藤館長が準核的に位置づけられる。この核的存在の二人

は、外部参入者ではないが、一度は地域の外部で生活した経験を持っていたり、頻繁に外部者と接することによってある種の外部者の視点を確保している。この意味で、この二人は、擬似的で引き金的な外部参入者とみなすことができる。そこで彼らを「フェーズ0の外部参入者」と称することにしよう。吸引力の核となる「フェーズ0の外部参入者」は、受け入れ側の内部と参入側の外部の両方の事情に精通していなければその役割を果たすことが出来ないという特徴を持っている。

また、先述したように小国町は知名度のある先駆的なまちづくりを展開しつつある。この先駆的なまちづくりのイメージや宮崎町長・江藤館長の顔によって、次項で述べるフェーズ1～3の外部参入者が吸引されている。さらに、小国町の既存の外部参入者の存在や口コミによっても新たなフェーズ2～3の外部参入者が吸引されているという特徴を持っている（Figure 5）。

(7) 外部参入者の参入時期による大別

また、外部者の参入や移住時期によって、大まかに外部参入者を①フェーズ1の外部参入者、②フェーズ2の外部参入者、③フェーズ3の外部参入者のように区分できる（Table 4）。

小国町が悠木の里づくりを提唱し木造建築群を創出した1980年代後半に外部からたびたび訪れている者・移住してきた者をフェーズ1の外部参入者、女性マラソン等のイベントと交流重視の1990年代前半に外部からたびたび訪れている者・参入移住してきた人たちをフェーズ2の外部参入者、各地区毎に住民活動を展開し始めた1990年代半ばに外部からたびたび訪れている者・参入移住してきた人たちをフェーズ3の外部参入者というように分類した（Table 4）。

(8) 受け入れ側のポリシーと論理

小国町は、これからの時代、田舎に活力を与えていくことが、新しい日本をつくっていく道ではないかという将来展望をもっている。その場合、農山村の方が豊かで、個性が活かされる社会であるという認識に立って外部参入者を受け入れている。しかし、ただむやみに外部参入者を受け入れればいいのではなく、受け入れ側は、外部参入者に対する理念やポリシーを持つことが重要である。その際に外部参入者の受け入れは、都市の論

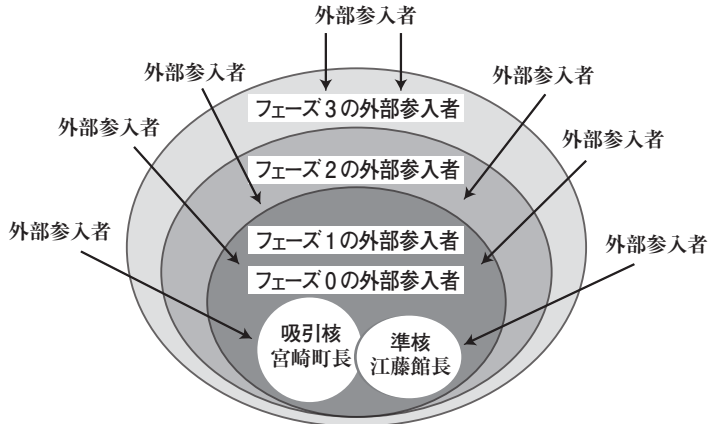


Figure 5 外部参入者に対する吸引力と核

Table 4 参入・移住時期によるフェーズ1~3の外部参入者の位置づけ

区分	時期	外部者の参入・移住時期
フェーズ1の外部参入者 悠木の里づくり提唱から木造建築の創出時代	1985年	・F氏が小国町を訪れる
	1986年	・A氏が初めて移住。U氏がたびたび訪れる
	1988年	・B氏がたびたび訪れる。C氏が初めて訪れる
	1989年	・E氏、V氏がたびたび訪れる
フェーズ2の外部参入者 イベントと交流等重視時代	1990年	・I氏が初めて訪れる
	1991年	・H氏は初めて訪れその直後に移住。I氏が移住 ・L氏が初めて訪れる。S氏が6月から役場勤務
	1992年	・B氏が10月に移住。C氏がたびたび訪れる ・D氏が2月に初めて訪れる。L氏が5月に移住。T氏が1月に移住
	1993年	・D氏が1993年に作品館開館。F氏がたびたび小国を訪れる
フェーズ3の外部参入者 各地区毎の住民活動等重視時代	1994年	・G氏、R氏が初めて訪れる。K氏が移住
	1995年	・D氏がアトリエを建設。G氏が積み木館を建設 ・J氏が移住。M、N氏が初めて訪れ、11月に移住。R氏が4月に移住
	1996年	・C氏、P氏が4月に移住。F氏がアトリエ建設。Q氏が5月に移住。Q氏が5月に初めて訪れ、7月に移住

理でなく、田舎の論理で受け入れていく心構えが不可欠である。さもなければ、町をいわば安物のように売られ、場合によっては集落や地域の土地利用の秩序が損なわれ、コミュニティの活性化に逆行することにつながりかねない。

5 ハビタント概念の定義と居住者の分類

以上の調査・分析結果を踏まえ、上述してきた「外部参入者」をより一般的に概念化して、「ハビタント」と呼称することを提唱する。以下では、小国町、あるいはその他の中山間地域のみに限定せず、交流時代という文脈で、より一般的に議論する。

5-1 ハビタントの定義

交流時代における居住者 (residents) の多くは、流動性や機動性の高い人になるであろう。このような居住者を、生まれた所から離れたことのない居住者 (「郷住者」、native) と区別して、入殖してくる人という意味でハビタント (「殖住者」と呼ぶことができよう。ハビタントとは、生まれた所とは別の居所を、選択して住む個々の人たちである。

したがって、履歴的にみて、ハビタントは外部参入者である。まったく新しい居住地が開発された都市の場合、そこに住むのは新住民ばかりとい

う場合があるが、それはハビタントのみで構成される街ということになる（大阪科学技術センター、1994）。一方、中山間地域にあっては、ハビタントはしょせんマイノリティである。居住者の大半は郷住者（ネーティブ）である点が中山間地域の大きな特徴でもある。場合によっては、殆どハビタントは存在しないか、存在しても「定住者」（インハビタント、in-habitant）になりにくいのが通例である。このような郷住者（ネーティブ）は、ともすれば閉鎖型社会を構築し、シェル化して、外部からのハビタントの参入を阻む傾向がある。中山間地域には特にそれが顕著である。

ハビタントは、潜在的に複数の居住地を持ち、そのうちの特定の居住地を主たる居所、それ以外の居住地を従たる居所として位置付けている。その複数の居住地を共時的（同時間的）に有する場合にその居住者を「セミハビタント」（半住者）と呼ぶ。一方、複数の居住地を通時的（時間軸上の）に有する場合に、その居住者は「トランスハビタント」（遷住者）と呼ぶことにする。

まず、複数の居住地を同時間的に有する居住者を考えてみよう。これはいわゆるマルチハビテーションというライフスタイルを選択したハビタントとみなすことができる。この場合、公式に登録していない居住地（従たる居所）の方からハビタントを捉える概念が必要になる。そのための概念として、筆者らが提起しているのが、「セミハビタント」という概念である。一方、同一のハビタントを、公式登録がなされている居住地（主たる居所）の方から捉える概念が、「インハビタント」である。ここで「登録」とは、例えば、住民登録など〈制度的登録人口〉のことであり、これにより法的・制度的にも「市民」（citizen）として権利と義務が生じることになる。

ただし、登録している所を主たる居所とみなすのは、あくまでも便宜的・操作的な立場に基づいた場合である（事実、インハビタントか、セミハビタントか、についての統計を得ようとすれば、このような流儀をある程度、認めざるを得ないであろう）。実質的に主たる居所であるところが、登録地ではない場合も当然起り得ないことではなからう。

次に、複数の居住地を通時的に（時間軸上で）

有する居住者の場合を考えることも必要である。これはトランスハビタントと称される。このタイプは、1年から数年単位で居所を変えていく「移り回り人間」を指している。同じセミハビタントが、他方の居所ではインハビタントでもあることになる。トランスハビタントは、時間軸上で前後のいずれの居所においてもインハビタントであることもあり得る。あるいは、後の居所（の一つ）からみて、セミハビタントであることも考えられる。このようにインハビタント、セミハビタント、トランスハビタントは、相互排他的概念ではなく、いわばその共通的特性をもった積集合が存在し得ることになる（Figure 6）。

5-2 トランスハビタント概念によるI・J・Uターン現象等の解釈

中山間地域の人口回復の成否の一つは、Uターン現象がどこまで進行するかであるといわれている。このUターン現象のことを上述したトランスハビタント概念を用いて説明することができる。Figure 7に例示したように、Uターン現象は、元々ネーティブであった居所①から、いったん外部の居所②に出てトランスハビタントとなったハビタントが、その後、居所②よりネーティブの居所①=③に回帰して来ることを指すと解釈できる。同様にして居所②から、ネーティブの居所①の近くの居所③まで戻ってくる。少なくとも二度トランスハビタントを繰り返すことがJターン

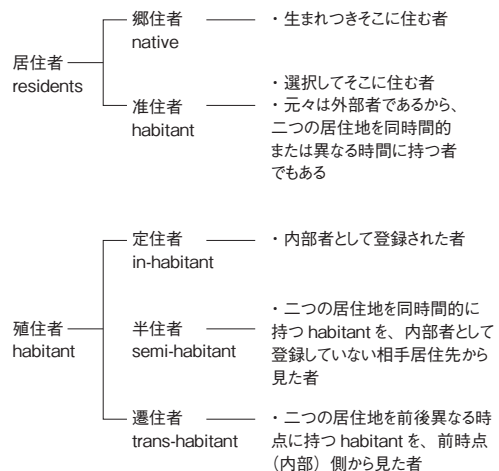


Figure 6 居住者の分類とハビタントの定義

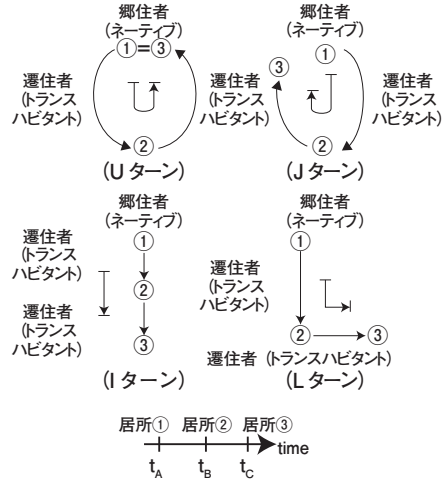


Figure 7 トランスハビタントとしてみたI・J・Uターン概念などの例示

現象ということになる。

一方、Iターンは、居所①から外部の居所③（いったん居所②に移ってから居所③に移ることもあり得る）へ移ることによってハビタントになることを指しているとみなすことができる。Iターンの真骨頂はそれが複数回繰り返され、回帰傾向が認められないところにあるとすることができよう。Lターンとは、2回目の相手先の居所③がもとの居所②とは方面が異なるような場合を指すと解される。なお、居所①から居所②へ移り、さらに居所③へ移る時間軸上の異なる時点を下記矢印のようにこのよう t_A , t_B , t_C で表すことができる (Figure 7)。

5-3 ハビタント概念と交流人口概念の違い

これまで述べてきたハビタント概念、及び国土庁等で使用されている交流人口概念（国土庁計画調整局、1995、1994）を整理して、両者の相違点を比較したのが、以下である。

第一の最も重要な違いとして、ハビタント概念では外部者一人ひとりの〈個性〉や〈かけがえのなさ〉や〈生活スタイル〉に着目している点にある（一人ひとりの質で捉える）。その上で、個性あるハビタントが、地域の活性化につながると考えている。一方、交流人口概念では外部者をつまるところ頭数（量）で捉えている。

第二に、ハビタント概念では観光客等のビジ

ターを外部参入者に含めないが（なんらかの形で地域に関わっている人を含める）、一方、交流人口概念ではビジターを外部参入者に含めて捉えている（地域に関わっていない人も含めている）。

第三に、ハビタント概念では外部参入者の居住地を時間軸上と地理的空間軸上の両面で捉えているが、一方、交流人口概念では実際に交流している地理的空間上のみで捉えている（すなわち交流人口には、トランスハビタントとしての捉え方がない）。

第四に、ハビタント概念では「二つの居所」という観点から、内部者と外部者のどちらにもなりうる人という捉え方をしている。一方、交流人口概念では交流人口=外部者人口として捉えていると解される。

以上、交流人口概念の違い（特に、外部参入者の一人ひとりの個性を認めて大切にすること）からも、ハビタント概念というコンセプトが重要かつ必要であり、有効であるということがいえよう。

6 結語

最後に、中山間地域活性化の主要な問題点を解決するためにハビタント概念が、一つの有効な糸口になりえることを強調しておきたい。

既述したように筆者らは、中山間地域の過疎問題の本質は、コミュニティ活力の低下・衰退にあ

ると考えている（なお、ここでいうコミュニティとは、市町村の行政単位全体というよりは、市町村の中の地区（旧村）や集落のコミュニティのことである）。よくある過疎問題解決のための幻想・誤解は、この点にある。つまり、頭数としての人口数の減少自体が、問題の核心であり、それをいかにくい止め、回復を図るかが解決の鍵を握っているという幻想・誤解である。

問題の本質は、「コミュニティの活力」を向上させられるか、どうかであり、解決の鍵は、見掛けのめざましい成果を一気に挙げることにあるのではなく、つつましくとも着実な一步一步をいかに築き上げ、前進していくかにあると考える。

それならば、ハビタントが寄与しうるのは「コミュニティの活力」のどのような側面においてであろうか。以下、上述した実証分析の結果を踏まえ箇条書きにする。

第一に、住民一人ひとり、そして集落や地区のコミュニティの個性ある多様なライフスタイル（生活の質）を醸成する上で、異質な価値観をもったハビタントの参入と関わりがよい意味で刺激になる。例えば、異質な社会にいた（いる）ハビタントの参入と関わりが重要である。

第二に集落や地区の人的、物的資源（地域文化、生活文化など）を掘りおこし（再発見、再認識）、顕在化（保全、活用、創出）する上で、地元の人々の見方（生まれ、育ち、長年住み慣れた目）とは異なった、新鮮で多様な視点のハビタントの参入と関わりが資源の再発見と活用などに重要である。

第三に、地区や集落のコミュニティが、外部との積極的な交流、及び情報の受信・発信のきっかけづくりやそれを推進する上で、外部とのパイプ役（仲介者）などでハビタントの参入と関わりが重要である。

第四に、地域の資源に付加価値を付け、外部者に対して積極的に差別化を図ることによって、地域固有の製品や商品を開発し、外部と交易していくことが、コミュニティの経済的・社会的活力の増強につながる。この場合ハビタントは開発上のノウハウの提供や地域資源の潜在的価値の発見などに寄与する。また、ハビタントは、第五の事項で述べたように、外部との間の情報の受信や仲

介役としての役割も果たし得る。

第五に、地区や集落の10年、30年、50年、100年先を見つめ、住民一人ひとりが、自ら知恵を絞り、理念・方針（コンセプト）を構築し、将来の夢（ビジョン）とコミュニティ計画（アクションプラン）を描き、その実現に力を合わせ、住民自ら汗をかく、「コミュニティ自治」を進める上で、プランナーなど専門の知識と技術のノウハウをもったハビタントの参入と関わりが重要である。

以上要するに、中山間地域のコミュニティの活力を向上させるためには、「コミュニティによるコミュニティとしての自覚」（アイデンティティの再確認）とその価値や他の地域と異なるかけがえのなさについての再認識が不可欠である。

その上でコミュニティの将来像を住民が主体性を持って構想し、それに関与していこうとする（＝セルフマネジメント）能力の向上が求められる。また、外部に対して情報の受発信を絶えず行い、ハード・ソフトの製品、商品を他地域と交易しうる地域経営マネジメント能力の向上が、併せて求められている。

このような課題にたちはだかる中山間地域の最大の阻害要因は、つまるところ「地域の閉鎖性」にある。ハビタントの参入はこのような呪縛から地域を解放するためのささやかでも確実な起爆剤となり得ると考えられよう。

本研究ではハビタント概念の提唱と明示化のための第一歩にしかすぎない。まだ、本稿ではハビタント概念を指標化する試みまで手が付けられていない。ここで取り上げた小国町に限定しても検証・検討課題を残している。とはいえ、本研究で提唱したハビタント概念は、単に中山間地域を対象が限定されるのではなく、大都市圏の新しい居住地の開発や古い町屋を抱えた旧市街地の居住問題の分析にも有効なアプローチを提示し得ると考えられる。この点についても筆者なりに検証を始めているが、併せて今後の課題としたい。

引用文献

- 田舎暮らしネットワーク『田舎暮らし大募集 九州編』（財）富民協会、pp.69-70, pp.106-107、1995年。
大阪科学技術センター「大阪ベイエリア「憩住都市」構想——ヒューマンな都市基盤の構築をめざし

- て」大阪科学技術センター『大阪ベイエリア開発検討部会報告書』1994年。
- 岡田實『現代人口論』中央大学出版社、pp. 34-35、1996年。
- 岡田憲夫「開かれた地域主義」『内発的発展に関する研究——新たな地域発展機会を探る』NIRA政策研究、4(4)、1991年。
- 小国町『悠木の里づくり10年の歩み』（町制施行60周年記念）1995年。
- 熊本県小国町『悠木の里づくり——二十一世紀への道筋』1991年。
- 国土庁計画調整局『「交流人口」地域を見つめる新たな視点』大蔵省印刷局、1995年。
- 国土庁計画調整局『「交流人口」新たな地域政策』大蔵省印刷局、1994年。
- (財)農村開発企画委員会『「新・田園生活の提案」大都市生活体験者の農村居住の推進に関する調査』1997年。
- 東京大学教養学部相関社会科学研究室「熊本県小国町のまちづくりに関する学術調査 最終報告書」、pp. 303-348、1996年。
- 宮崎暢俊『とっほすの風——小さな国の大きな挑戦』七賢出版、pp. 40-56、1994年。

Analysis of Outsider's Immigration Process in Mountainous Communities: Fostering the Notion of "Habitant"

Norio OKADA Toshikazu KAWAHARA

Abstract:

Given the ages of communication to follow in the next century, this paper focuses on the immigration process of outsiders into mountainous communities in Japan by analyzing the notion of "habitant." With Oguni Town, Kumamoto Prefecture as a case study area, illustration has been made to identify differences in types of habitants, such as inhabitants, semi-habitants and trans-habitants, from among those outsiders who practically reside in Oguni. The case study has contributed a great deal to the fostering and vitalization of these proposed notions. In conclusion further extensions have been suggested to improve their applicability and practicality, especially, related to vitalization of mountainous regions.

Keywords:

immigration process, habitant, ages of communication, vitalization of mountainous regions